

意見交換会等の開催結果について（概要・アンケート結果）

食品に関するリスクコミュニケーション（名古屋） ～ B S E に関する講演会～ 5 月 21 日開催	・・・ 1
食品に関するリスクコミュニケーション（仙台） ～ B S E に関する意見交換会～ 6 月 8 日開催	・・・ 15
食品に関するリスクコミュニケーション（東京） ～ 食品安全の新たな取組みの 1 年とこれから～ 7 月 2 日開催	・・・ 32
食品に関するリスクコミュニケーション（東京） ～ 薬剤耐性菌の食品健康影響評価指針案に関する意見交換会～ 8 月 2 日開催	・・・ 48
食品に関するリスクコミュニケーション（東京） ～ 日本における牛海綿状脳症（ B S E ）対策の検証に関する意見交換会～ 8 月 4 日開催	・・・ 54
食品に関するリスクコミュニケーション（大阪） ～ 日本における牛海綿状脳症（ B S E ）対策の検証に関する意見交換会～ 8 月 24 日開催	・・・ 70

食品に関するリスクコミュニケーション（名古屋）
BSEに関する講演会 概要

1. 日 時：平成16年5月21日（金）13：30～16：30
2. 場 所：愛鉄連厚生年金基金会館（愛知県名古屋市中村区）
3. 主 催：内閣府食品安全委員会、厚生労働省、農林水産省
4. 参加者：178名（消費者、食品関連事業者、自治体関係者、報道関係者等）

5. 議 事

（1）開会

（2）開会挨拶 小泉直子 食品安全委員会委員

（3）講演

「食のリスク分析 BSEを例として」

熊谷進 東京大学大学院生命科学研究科獣医学専攻教授

定量分析の難しい微生物分野では、1995年以降リスクアナリシスの手法をとるようになってきた。リスクアナリシスは、リスクアセスメント、リスクコミュニケーション、リスクマネジメントの3要素からなり、各機能の担い手は分離しているが、相互協力なくしては成り立たない。リスクアセスメントの一般原則の中でも特に考慮しなくてはならないのは、リスクマネジメントの圧力によって科学的判断をゆがめないこと、透明性の確保などである。

BSEのリスクアナリシスもこれまでの微生物や自然化学物質の汚染と同じように考えることができるが、ヒトの潜伏期間が長いことは異なる点である。

リスク推定をすると、日本では食用に供された感染牛は100頭より少なく、人口が多いこと等を考慮して、将来予測発病者も極めて少ないといえるだろう。

【講演 に対する質疑】

会場： BSEの「リスク推定へのアプローチ」において、全頭検査をしない場合でも、症状を呈する牛に関しては検査をすると考えて良いか。

熊谷氏： 実際の行政対応を提示しているものではない。現実として実際に使うことのできるモデルになるには、様々な条件を加味していかなくてはならない。複雑なモデルになるだろう。

会場： BSEの「リスクの推定」において、将来予測の期間はどのようになっているのか。

熊谷氏： 出典資料には期間が明示されていない。ただし、様々な対策を各国が行っているので、今後BSEはゼロになっていくのではないか。

会場： リスクアセスメントがマネジメントから分離され、透明性が確保されなければならないという考え方が、興味深かった。米国への全頭検査要求について、どう考えるか。

熊谷氏： 全頭検査に関してはマネジメントの範囲であり、自分が答えるべき立場ではない。ただし、リスクマネジメントは、安全性の科学的な評価のみをベースにできない。様々な要素（例：宗教、食習慣、経済性等）を考慮しなくてはいけないことも認識しておくべきである。

講演

「BSE（牛海綿状脳症）と、その食へのリスクについて」

金子 清俊 国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第7部長

孤発性クロイツフェルト＝ヤコブ病（CJD）は、自然発生型で、日本でも年間100万人

に1人の発症がある。我々は人間の宿命として、孤発性CJDになるリスクを既に持っている。

現在、プリオン感染の危険性は、ネズミやヒトの筋肉などでは脳の五千分の一程度の量が確認されているが、牛では検出されていない。今後、検出感度が上がることで、筋肉から異常プリオンが検出される可能性はゼロではないが、量的に考えた場合、その部位が特定部位になることは考えにくい。

現在のBSE対策において、特定部位がヒトの口に入らないことが最も重要である、米国は「最小リスク国」となっており、特定部位は30ヶ月齢以上でしか除去していない。しかし、それはBSEの浸潤状況が把握できていないから「最小リスク国」なのかもしれない。つまり、米国に対して、特定部位の完全除去を求めていくことが重要である。

【講演 に対する質疑】

会場：プリオン蓄積の最新知見（リンパ系を介する）が知りたい。

金子氏：虫垂（リンパ組織の「かたまり」）等の腸管神経叢が注目されている。プリオン蓄積経路にはリンパ系と神経系が考えられ、種によって割合が異なる。vCJDの特徴としてリンパ（血液）からのプリオンタンパクの検出がみられ、献血制限等が取り入れられている背景になっている。（孤発性CJDではリンパ系からの検出はない。）

会場：米国のBSE検査法の感度は、日本と比べるとどうなっているのか。

金子氏：米国は免疫組織学検査のみ行っている。

厚生労働省：米国の検査法では、日本の8頭目のような事例（ウエスタンプロット法でのみ陽性反応）では陰性になってしまう。

会場：背根神経節のリスクはどのくらいあるのか。

金子氏：定性的には低度で、量的にも脳や脊髄に比べ小さい（数%）。生きた牛を使つての正確なデータをとるには時間がかかる。今後の研究が待たれる。

農林水産省：リスク低減のために、来月から背根神経節の除去も実施していく。

会場：感染力価は月齢によって変わるのか。

金子氏：神経節からの異常プリオン検出は若い月齢に見られることから、脳に蓄積する前にどこかに異常プリオンが集まると考えられているが、十分なデータではない。EUも腸は全月齢除去している。

会場：ヒトの脳神経系病変とvCJDの病変はどうちがうのか。若い月齢の牛にも見られることから、BSEにも「孤発性」のようなものがあるのか。

金子氏：診断を誤ることはない。ただ、併発している場合、どちらかを見落とす可能性は否めない。「孤発性BSE」の存在も考えられる。

(4) 会場との意見交換

会場：BSEの評価方法を知りたい。疫学データとはどのようなものか。

熊谷氏：食中毒等のような疫学データ（事例を集めて発症頻度との関係で推定する）はBSEではないだろう。（脳を何g食べれば発病するかというデータ）仮定に基づいた推定値である。

会場：BSE発症原因は特定されているか。交差汚染の確率は考えられているか。米国のBSEリスク推定はどうなるのか。（将来予測発症者数等）

金子氏：核酸という説もあるが、現在では、「プリオン」原因がオーソライズされてい

る。

農林水産省： 我が国では牛の肉骨粉は全面使用禁止・焼却処分されている。米国では牛以外への使用を認めており、その点は日本政府として指摘している。

厚生労働省： 巡り巡って日本に入ってくることを懸念されている背景には、日米協議の内容が国民を無視して決まってしまうのではないかと不安があるのではないか。日米協議については、基本的な科学的認識に大きなギャップがあることがわかったため、お互いに事実関係に戻して科学的に議論を進めている。

熊谷氏： アメリカには感染頭数等データがないために、推測できない。

(5) 閉会挨拶 梅津準士 食品安全委員会事務局長

「食品に関するリスクコミュニケーション（名古屋）」
アンケートの集計結果

開催日：2004年5月21日（金）

参加者数：169名 回答数：120名（回答率71%）

問1	ご自身について、ご回答ください。		
1)	消費者	29	24.2%
2)	食品関連事業者	25	20.8%
3)	食品関連団体	10	8.4%
4)	研究機関	3	2.5%
5)	行政関係	46	38.3%
6)	マスコミ関係	1	0.8%
7)	その他	4	3.4%
	・学校教員		
	・農協		
	・大学教員		
	・農業		
	無回答	2	1.6%
問2	本日の講演会は、何かからお知りになりましたか。		
1)	食品安全委員会のホームページ	14	11.5%
2)	食品安全委員会からのご案内資料	32	26.2%
3)	都道府県等自治体からのお知らせ	21	17.2%
4)	関係団体からのご案内資料	38	31.2%
5)	知人からの紹介	5	4.1%
6)	その他	12	9.8%
	・業界紙(2) ・職場の情報(1) ・新聞(4)		
	・内閣府食品安全委員会事務局からのご案内による(1)		
	・農水省からのメール(1) ・農水省のホームページ(3)		
問3	本日の講演についてお伺いします。講演内容について、十分に理解することができましたか。		
1)	理解できた	24	20.0%
2)	だいたい理解できた	79	65.9%
3)	あまりできなかった	16	13.3%
4)	できなかった	0	0.0%
	無回答	1	0.8%

附問3 - 1 (問3で「理解できた」「だいたい理解できた」と回答した方)

内容がわかりやすかった点はどこですか。当てはまるものは全てご回答ください。

1) 説明が明瞭で的確だった	56	43.4%
2) 資料内容が平易でわかりやすかった	54	41.9%
3) 適切な説明時間が確保されていた	15	11.6%
4) その他	4	3.1%

- ・最近独学で勉強していた為、解かりやすく、又、間違っていた点もよく理解できた。
- ・金子先生の話はポイントをおさえて話しにずっと入り、大変よかった。熊谷先生の方は、具体的なイメージを感じにくかった。
- ・平素*する資料で知っている部分があったので。
- ・一般論に終始し、特に目新しいと思われる内容ではなかった。

附問3 - 2 (問3で「あまり理解できなかった」「できなかった」と回答した方)

内容がわかりにくかった点はどこですか。当てはまるものは全てご回答ください。

1) 説明に専門用語が多い	16	55.2%
2) 資料がわかりにくい	5	17.2%
3) 聞き取りにくい	2	6.9%
4) 適切な説明時間が確保されていなかった	4	13.8%
5) その他	2	6.9%

- ・聞きたい内容と説明内容がちがっていた。
- ・遅刻した。

問4 BSE問題について、どのようなことにご関心がありますか。ご自由にご記入ください。

- ・消費が低迷している時代です。安全と言い切れるような根拠がほしい。
- ・発生前の感染牛で、検査にひっからないものの安全性。牛の解体方法や危険部位除去がどれくらい正しくやられているか。
- ・摂取から発病。
- ・ない。
- ・牛肉の安心・安全の確保。
- ・何がどの様に危険であるのか、十分な説明が国民になされていない様に思う。何も解らないまま、危険性だけが一人歩きしている様に思う。理解が進めば、不安も軽減すると思うが。
- ・BSEによる人に感染する心配。
- ・牛から人間に感染するかが心配。
- ・人に感染するかどうか。
- ・全頭検査の必要性があるかどうか。全頭検査により、リスクがどの程度減少するのかどうか。

- ・英国でmad cow diseaseとして確認されてから、我国がそのレンダリング産物の輸入を禁止するまでの我国での流通先、流通量、そしてそのリスクがどれくらいの物かを知りたい。
- ・輸入を解禁すべきか？するとしたら何が条件か？
- ・人間には発病しないと聞きますが、安心してよいものでしょうか。
- ・米国牛肉の輸入再開。外国の対処方法。
- ・腸全体をとり除くことが議論されていること。
- ・まとめにあった3点について議論を深めてほしい。
- ・米国の牛肉の輸入制限がこれからどうなるのか、どんな条件で解除されるのかが気になります。他にもこれまで米国産の牛肉がかなりの量、日本で消費されてきていると思います。国産のみではなく、米国産を原因として、患者が発生するリスクはないのでしょうか。(アメリカのズサンな処理や、潜伏期の長さから考えます。)
- ・アメリカがどこまで検査体制を整えるか。
- ・米国の圧力に対する対応。
- ・検査をしていない国からのものについて、どのような対応をしていくのか？
- ・リスク分析の基礎など知識の整理。
- ・BSE検査と特定危険部位除去について、全頭検査しているにもかかわらず、特定危険部位除去をすることについて関心があった。
- ・潜在的な患者の数。
- ・家庭で牛肉を食べる場合、この牛肉は安全・安心なのかどうか？
- ・販売について仕事をしています。今後の方行性について、消費者の意見と科学的な見解をはっきりして今後は決めてほしい。
- ・BSEについての知識を深める。
- ・生前試験法の確立と情報入手。
- ・検査のコストが市況に反映されていないと思う。世情に評価されたい。アメリカの要*にも同じ内容があったと思う。他の病*も同様と思う。
- ・現在の検査体制でどの程度の安全性が確保されているのか。消費者、食品製造業者へのBSE危険度の説明をする場合の根拠。とく定期券部位は今後新たに見つかる可能性はあるのか。
- ・科学的な根拠に基づいた危険性はどんなことか。米国牛の輸入再開にあたってはやはり全頭検査(無理であれば可能な範囲)で行ってほしい。
- ・安心して食べたい。
- ・実際にBSEの検査をどのようにしているのか図で書いた資料と説明がほしかったです。
- ・発ヒトへの感染経路。
- ・*寄における死亡牛のBSE措置*制。
- ・BSE検査に対するOIEの判断。日本国内BSE発生の原因。
- ・米国産輸入牛の解禁問題。非汚染国の実情。
- ・BSEのメカニズム。行政のアメリカへの対応や考え方。

- ・感染牛の生前診断法の確立を早急になすべきである。
- ・BSEの問題が社会的に関心が高い事例になってきており、今回のような科学的なコンセンサスを国民全体に啓蒙・説明することの重要性、難しさがあり、また日米協議など国際的なBSEについての意識の違いを補正しながら行っていく必要性を感じた。
- ・なぜ海綿状になるのか。米国と日本との検査の違い。
- ・日本では全頭検査をしているので安心でき、よい手段と思う。アメリカからの輸入検査も是非に全頭検査にしてほしい。アメリカでヤコブ病が沢山でた記事が新聞やTVで知ったが、その後何の音さたがないので不安です。世寄中のBSEにもって早くくわしい状*を消費者に伝えてほしい。
- ・食の安全を確保するように。(アメリカとの協議をきちんとしてください。)
- ・BSE発症のメカニズム等(金子先生の話は非常にわかり易かったです)。
- ・研査の在り方、危険部位の評価、除去方法。
- ・BSE問題が騒がれる前に、高校で牛の目の解剖を素手でマスクをつけずにやっていたので少シコワイです。BSE問題全体。異状プリオン等。
- ・牛の病気が何故人間にうつるのか、また、BSEの科学的な所でどこまで解ってきたのか。
- ・消費者が感じるリスクに対するマネジメントについて。
- ・米国産牛肉は輸入再開してもよいかどうか。
- ・BSEが生産者へ与える影響。
- ・SRM除去が重要となっていく場合、その確実な実行の担保をどうとっていくのか難しいと思っています。
- ・感染ルート。病原性。
- ・変異型CJDとBSEの関係が明らかになっていない。試験的に確認がむずかしい問題であるが、国際的な活動として早期に明らかにしていただきたい。
- ・アメリカとの交渉がとても気になります。日本政府にがんばってもらいたい。全頭検査と特定危険部位の除去など、日本と同様の検査をアメリカが国として責任をもって実施するまで、米国の牛肉の輸入禁止は続けてください。たとえ牛の頭数が多くても、生産国としての責任を米国はもつべきです。子牛で輸入されて、大きくなってBSEが発生、そのようなこともありうると思いますので、これからも安全を確保する意味でしっかりと検査をお願いします。
- ・「全頭検査」の評価がどのように(国際的に)受け止められているのか興味がありました。EU基準と日本の現状、米国の現状が概説され面白く拝見しました。
- ・BSEは遠い所の問題だと思っていましたが、お話を聞き消費者はどうすべきか、選ぶ権利はあるが店、生産者を信用するしかないと思いますので、行政のリスクマネジメントをしっかりとしてほしい。
- ・牛肉を産地から仕入れ、販売する仕事をしている。安全・安心な牛肉を消費者に届けるためにはきちんとしたトレーサビリティの確立が求められると思う。
- ・日本における発生の原因。情報を一般にわかりやすく公開してほしい。
- ・日本人が通常の平均的な食生活で摂取される食肉に於いてのリスク。

- ・安全性。原因をもっとさぐる必要性（根本的な内容も含めて）。
- ・まだ発生前の消費はもどっていない。
- ・牛のBSEばかりとりあげないでほしい。フグに死ぬ人の方が多いはずである。
- ・今後の日本におけるBSE対策の見通し。感染源の追求。
- ・日本と海外でのとらえ方、規制の方法。
- ・日本人は牛を食べないようにし、魚・野菜中心に切り替えるべき。
- ・安全ではなく、安心に対する消費者の意識。
- ・食品の安全についての説明。
- ・安全性についてどのような対策をたてているかということに。
- ・米国産牛、解禁されるまでにどの程度情報が開示されるのか。
- ・*。安全な牛肉をとりもどして。
- ・アメリカ牛の輸入圧力に対して、消費者の理解をえた解決がされること。
- ・特定部位の除去の有効性。生体での診断。
- ・発症している牛の危険部位を過去摂取してきたことで将来の人間における発症について関心がある。
- ・BSEについて興味深く聞きました。安全な肉を店頭でよく確かめて求めたいと思います。一日も早く安全な牛が出廻ることを願います。

附問4 - 1 上記の関心点について、今回の講演会は役に立ちましたか。

1) 大変役に立った	13	10.8%
2) 役に立った	56	46.7%
3) あまり役に立たなかった	8	6.7%
4) 役に立たない	0	0.0%
無回答	43	35.8%

問5 今回の講演会についてご意見・ご感想などございましたら、ご記入ください。また、リスクコミュニケーションに関するご質問・ご意見などもございましたら、あわせてご記入ください。

- ・特になし。
- ・リスクについて深めることが出来た。
- ・我々事業者も消費者に説明するが、BSEの様な問題は安全について説明できない。BSE、SARS、鳥インフルエンザ等、その危険性を伝えることと併に、発生から早い時点で正確な情報を国民に伝えてほしい。
- ・熊谷先生の話... BSEに対してリスク分析を具体的にどのように適応させていったかのプロセスが説明がなくて非常に残念でした。質問に対する対応もリスク評価のモデルにすぎないという回答では、リスクマネージャー（行政）とよく話し合いがされていないという印象を与える。
- ・今回の講演の内容に関してはとても有意義でした。ただ、内閣府、厚労省、農水省の方々がみえているなら、それぞれの現在わかっているDATAの提示と、今後の見通

し、考えなどを提示していただけると更に意識が高まったと思う。

- ・「SRM除去」が重要であることを前面に出してリスクコミュニケーションを進めてください。司会を若い女性が担当しているが、あまり講演の内容を理解していないと思われるのに、言葉が白々しく聞こえるので、食品安全委員会の職員がやった方が良いでしょう。
- ・BSEについてわかりやすいお話だったと思います。この問題の特性上、将来どうなるのか、全頭検査はずっと続けてやられるのでしょうか、といったことです。(コストの関係と必要性の関係について知りたかった。)
- ・今後社会を担う小学生などにもっとこのような話をすべき。
- ・消費者の立場からはもう少し具体例を入れてほしかった。
- ・委員会も縦割行政の体を抜け*せず、厚労・農水のまとめか*る*と思われました。大丈夫でしょうか。寄*帯？(コンセンサス?)
- ・質問時間が十分にあってよかった。
- ・野生動物を介しての人獣共通感染症対策について。情報、対応可能な病院の確保。
- ・英国でのBSE発生とV-CJD発生数の関係(1/1000くらい)が他の国にどう関連するのか気になります。わかりやすく言うと、牛に対する英国の反応を精査し、それと同じことを排除していけば、日本でのBSE八誌の確立は極めて低くなる。人間のV-CJDも同じように排除していけば良い...ということで。英国において判明していることをできる限り開示し、数との関連で示して頂くことにより、我が国においての危険性は自ずと想像できるようになるのではないかと思います。(金子先生P19を参照して。)
- ・鶏インフルエンザ、SARSなどのリスクコミュニケーションの場合、設定していただきたい。
- ・判りづらかった。もう少し事例で話してもらえると深められたと思います。
- ・店で売られている牛は何才の牛だったのかを知らせて欲しい。飼料のチェックは*然に行われているのか心配です。
- ・各種のリスクについての話でタバコが悪い事をあらためて感じたのに、会場の空気は悪く、場外での喫煙場所もすぐ近くにあり何を聞きにきたのかあまりにマナーの悪さと会場の主催者にびっくりしました。全館禁煙にすべき!!
- ・リスクコミュニケーションに関して、もう少し具体例をあげて説明してほしかった。
- ・地域段階(地域独自でリスクコミュニケーションを)で開催する場合の補助、支援を検討して欲しい。
- ・引き続き、情勢*で、開催を。
- ・たまに難しい専門用語を言うので、理解がしづらい時もありましたが、全体としては理解しやすかったです。あと「食品の安全性に関する用語集」はとてもよくできていると思います。
- ・熊谷先生の話はもう少し具体的な話があればよかった。
- ・講演テーマのポイントしぼって説明願いたい。全体的に時間が少なく配分に工夫ほしい。参加者の範囲をしぼって開催(消費者、製造者、その他)。
- ・今回は自分自身の勉強のためにとあって来させていただきました。消費者でもかなり

意識の高い女性の方の参加が目立ち、驚きましたが、逆に生産する側の参加率はどれくらいなのか、生産者と消費者の意識の足並みがそろわなければ、リスクコミュニケーションは成立しない気がします。各省庁の方の話等をもっとフランクに、生産者がやり取りできる場でなければいけないのでは。

- ・生産・流通実態がわかるような講演・研修をしては。
- ・学者や専門家の意見が一致しなかった時、当然検討のしなおしでしょうが、時間との関係や企業との関係でできようということは...ありうるのでしょうか。
- ・「Risk managementについて科学低根拠があってもそれを外れていく場合もあり得る」という説明（熊谷先生）には深く納得しました。意見交換の際に少し見えた所として、タテ割りの役割分担はよいとしても共通認識が十分に共有できているかどうかは疑問です。農水と厚労の間はうまくつながっているのでしょうか。
- ・資料の文字が大きく分かりやすい（室内照明が薄暗かったが対応出来ました）。両講師の言葉がとても分かりやすい（喋り方がゆっくり、歯切れが良い）。今の世の中、全く安全な食品はないので、自分の体力をつけてあらゆる雑菌に抗する力をつける必要がある。
- ・農水省のリスクコミュニケーション担当者の発言の中の補助金の件、ごく簡単に軽々しく言われるのは、非常識。税金からの補助金、現場での対応、会計検査等が非常に厳しいのに。なにかリスクコミュニケーション？厚労省と農水省との「種のカベ」が大きいのでは？農水×。
- ・BSEのリスクについては安心しました。食肉（牛肉）が他の色々な食品の中ではもっともリスクが逆に少ない気になりました。それよりも、意見交換会の中での農水省、厚労省の方の回答を聞いていると、逆に自己満足のデータをコーデックス委員会につきつけて、データよりも実際相当汚染されている「カドミ米」が一番危険であると思いました。
- ・リスクはよくわかるが、そればかりおっている感があり、原因がおろそかになっている様な気がしました。
- ・外務省の海外危険情報のように、食品についても海外で食する場合の危険情報も知らしめてほしい。
- ・講演時間をもう少し（1時間程度）長めのほうが、話の内容がわかるような気がする。
- ・質問時間もあって良かった。
- ・食品の不安をあおることで、販売部数拡大を目指すマスコミも多すぎるような気がする。彼らへの教育がもっとも必要なのではないだろうか。
- ・消費者の立場として考えたい。
- ・不安に思っていた日本のBSE検査方法が理解出来たこと。
- ・パネル等、もっと活用していただいた方がわかりやすいと思いました。
- ・用語になじみがない。研究者はよく分かっていても、知識のない一般聴講者には用語そのものにひっかかりを感じる。
- ・食の安全について考えていくうえで、専門家の意見が詳しく聞ける場がもたれたことは大変よかった。

- ・ B S E のリスクについてこういった機会に消費者に理解されると良いと感じました。
- ・ 大変わかりやすい面もありましたが、やはり専門的なところになると一般消費者にはわかりにくい。今後は一般消費者に着眼を置き、そのへんのレベルにおいてリスクを考えるべきである。「リスクを語る」ではなく「リスクと対話」になることを望む。
- ・ 専門的な言葉が多く出て来てとまどう。

問6 今後、食品安全委員会におけるリスクコミュニケーションとして行ってほしい取り組みは何だと思われますか。当てはまるものを全てお答えください。

- | | | |
|---------------------------------------|----|-------|
| 1) 今回のような有識者による講演会（質疑応答含む）の開催 | 66 | 28.9% |
| 2) 基調講演やパネディスカッションを盛り込んだ意見交換会の積極的な開催 | 36 | 15.8% |
| 3) 食品の安全に関する平易で基礎的な勉強会の開催 | 59 | 25.9% |
| 4) 参加者全てが発言できるような、少人数の座談会の開催 | 5 | 2.2% |
| 5) 消費者、生産者、事業者が意見をいつでも言える窓口の設置 | 33 | 14.5% |
| 6) 地方における意見交換会の開催 | 27 | 11.8% |
| 7) その他 | 2 | 0.9% |
- ・ 一般消費者への啓蒙活動。
 - ・ 行政間の担当者会および各部局の連絡会議等を開催。

問7 今後の講演会や意見交換会で取り上げてほしいテーマは何ですか。当てはまるテーマを3つまで下記から番号でお答えください。

- | | | |
|-------------------------------|----|-------|
| 1) 留農薬に関するテーマ | 39 | 12.7% |
| 2) 食品添加物に関するテーマ | 42 | 13.7% |
| 3) 遺伝子組み換えに関するテーマ | 44 | 14.4% |
| 4) 食品中に混入する汚染物質に関するテーマ | 29 | 9.5% |
| 5) 動物用抗菌性物質（いわゆる抗生物質）に関するテーマ | 36 | 11.8% |
| 6) 有害微生物に関するテーマ | 14 | 4.6% |
| 7) 輸入食品に関するテーマ | 52 | 17.0% |
| 8) 食品表示に関するテーマ | 34 | 11.1% |
| 9) リスクコミュニケーションに関するテーマ | 16 | 5.2% |

問8 このような講演会や意見交換会にご参加していただきやすい開催日時は、いずれですか。

- | | | |
|----------------------|----|-------|
| 1) 平日の午前 | 6 | 4.8% |
| 2) 平日の午後（1～5時頃） | 91 | 73.5% |
| 3) 平日の午後6時以降 | 5 | 4.0% |
| 4) 土曜日の午前 | 6 | 4.8% |
| 5) 土曜日の午後（1～5時頃） | 11 | 8.9% |
| 6) 土曜日の午後6時以降 | 1 | 0.8% |
| 7) 日曜日・祝日の午前 | 2 | 1.6% |
| 8) 日曜日・祝日の午後（1～5時頃） | 2 | 1.6% |

9) 日曜日・祝日の午後6時以降 0 0.0%

問9 以下の食品安全委員会の取組みのうち、ご存知のものあるいは利用したことのあるものを全て選んで下さい。

1) 委員会、専門調査会の傍聴が可能なこと(原則公開とされていること)	21	9.0%
2) 食品安全委員会ホームページ	63	26.8%
3) 食の安全ダイヤル	27	11.5%
4) 食品安全モニター	34	14.5%
5) 食品安全委員会の行うリスク評価案件に関する意見募集及び寄せられた意見に対する考え方のホームページ上での掲載	26	11.2%
6) 食品の安全性に関する政府広報(鳥インフルエンザ等)	61	26.1%
7) その他	2	0.9%
・パンフレット		
・厚生労働省のメルマガ		

問10 ご自身の食生活について教えてください。

気をつけていることがありましたら、できるだけ具体的にご記入ください。

(例:加工食品は表示を確認し***の記載があるものを選ぶ。食中毒を防ぐために加熱、洗浄を充分にする。)

- ・生産者と顔の見える関係で食材料を入手して30年、手造りできるものは、なるべく手造り(調味料、味噌等)。国産・有機栽培の野菜、米、飼料を気をつけて育成された畜産物を手に入れる努力をしています。
- ・片寄った食事は食物はさけ、多品種を摂取するように心掛けている。
- ・表示を見る。
- ・特になし。
- ・ない。
- ・出来るだけ手づくりにして、食品添加物を減らす工夫をしている。
- ・旬のものを生産者より直接購入(例:青空市場等)。加熱、洗浄は当然の事。
- ・お米、牛乳、野菜等、生産者のよくわかった所から購入する。加工食品は表示を確認する。
- ・野菜等、国産品を選ぶ様にしています。中国とかトンガとか色々な国からのがありますので。
- ・加工食品は表示を確認。残留農薬に注意。
- ・賞味期限の確認、調理器具の洗浄。
- ・表示。地元で生産された旬のものを食べる。1つのものを食べすぎない。
- ・加熱に気を付けています(まず火を通す)。
- ・健康食品の摂取。

- ・実際の食品の元の色と比較して店頭に並んでいる物を吟味してみるが、そこまで強い意識を持ってはいない。微生物による汚染は自ら勉強して妥協点を考えてはいる。又、食に関するニュースになるべく興味を持ち調べる様にしている。
- ・添加物の多い食品はさける。
- ・加工食品の表示、賞味期限の確認。野菜はほとんど国産品を購入。
- ・家庭で調理するようにしている。
- ・化学物質よりも微生物問題の方が食生活ではより重要であることを理解できるよう頑張ってください。
- ・余り考えていない。
- ・旬のものを食べる。
- ・カキの生食、鶏の霜降り等は食べない。
- ・スーパー等量販店での食品の保管状況のチェック。食品流通、対応（清潔、保管方法(冷蔵)）がなされているかどうかをチェックし、その店の信頼性を確保している。以前、表示等で疑わしい店があったので注意したことがある。
- ・食材は基本的に国産を購入している。
- ・賞味期限や賞費期限などが少しでも新しいもの。農薬など薬品使用の少ない食品。手洗い。
- ・外出後のうがいと手洗い。
- ・賞味期限のなるべく長いものを選択。
- ・原材料の確認（*にて）を行う。保存料（そのひん酸K）と合成着色使用のものは食べない。肉などは、市販で購入すると素性が不明なので不安。
- ・牛肉はオーストラリア産。
- ・食品のうらの表示を見て買う。
- ・表示の確認（期限表示、原産地）。できる限り食品は加熱して食べる。生の肉は食べない。
- ・手指の洗浄、加熱。
- ・野菜を多く摂取する。
- ・無農薬、有機、新鮮。
- ・表示の確認、期限日、手洗。
- ・表示は必ず確認する。出来るだけ地産地消を心傾て、生産者のはっきりしているものを買う。添加物には気を付けて、あまり使用されていないものを選ぶ。
- ・加工食品で内容がはっきり分かる物を購入。なるべく手造りをする。食物繊維をよく食べる。バランス良い食生活。腹八分目の食事量。塩分と糖を一日にとる量を決めた分をとる。
- ・地元のをできるだけ食べるようにしています。
- ・BSE問題以来、あまり牛肉はとらないようにしています。
- ・できるだけ不要な添加物を使用していない食品を選んで食べています。
- ・食品の適切な保存。
- ・Made in Chinaの野菜は基本的に購入しない。

- ・自分で栽培したものをできるだけ食べるようにしています。
- ・国産をなるべく買うようにしている。
- ・特に気にしてません。過敏にならないようにしてます。自然にあるものをそのままたべたいです。
- ・食品表示はかならず確かめます。食卓にのぼる食品の中心は、可能な限り国産のものを利用します。カロリーベースの自給率が40%を下まわっているので、買い物は苦労します。
- ・安全・安心の食材を選ぶ。早めに調理する。賞味期限の確認。食材・食品の保存に配慮。
- ・出元がしっかりしている食品、表示が見やすく分かり易い食品を購入している。食生活はバランスが大切。野菜をしっかり食べることを心懸けている。
- ・凝装、品質等。
- ・野菜やフルーツは農薬漬けで当たり前という前提で流水でよく洗っている。近海魚は大変汚染されていると聞いているので食べない。牛のホルモン類はなるべく食べない。
- ・GM食品はやめる。
- ・私の仕事は食に対する安全を消費者に伝えること。大変勉強になりました
- ・消費期限をチェックしながら購入している。
- ・健全な日本食を目指す。国産野菜をなるべく選ぶ。
- ・牛は食べない。牛肉はまずい。
- ・消費期限のみ注意している（賞味期限は気にしない）。
- ・加熱する。
- ・食品は全て、特定のものを選ばず、はば広く色々な県・地方などの物を使用する。自分で出来る野菜は家庭菜園で無農薬、化学肥料を使用せず作る。
- ・賞味期限よりも、見た目・臭い等で問題ないかの判断をしています。
- ・食べたいものをおいしく食べるだけ（好き嫌いはないので）。
- ・鮮度のよいものをできるだけ食べる。加工度の低いもの、伝統的に食生活の中で試されているものなどを大切にする。
- ・栄養バランスのみ。
- ・添加物の少ないものをとるように心がけている。
- ・農薬害を防ぐため湯で洗浄。表示をよく確認し、賞味（消費期限）の中に食用する魚・肉はよく加熱してから食用にする。

食品に関するリスクコミュニケーション（仙台）
- BSE に関する意見交換会 - 概要

1. 日 時：平成16年6月8日（火）13：30～17：00
2. 場 所：仙台国際センター（仙台市青葉区青葉山）
3. 主 催：内閣府食品安全委員会、農林水産省、厚生労働省、宮城県
4. 参加者： 191名（消費者、食品関連事業者、自治体関係者、報道等）
5. 議 事

- (1) 開会
- (2) 開会挨拶 寺田雅昭 食品安全委員会委員長
- (3) 参加者との意見交換

第1部 報告・講演

1. 「BSE問題と対応の経緯」

寺田雅昭 食品安全委員会委員長

リスク分析の枠組みは、リスクを効率よく低減することを目的としている。リスクマネジメントを行う農林水産省、厚生労働省、リスク評価を中立的、科学的に行う食品安全委員会、消費者、生産者等の関係者間のリスクコミュニケーションが重要である。

我が国は、BSE感染牛の発生以来、特定部位の除去・焼却、全頭検査、死亡牛検査、トレーサビリティ等の対策が行われてきた。安全は客観的なものだが、安心は主観的なもので、安心を得るためには信頼を得ることが必要だ。

2. 「食品のリスク分析について」

品川邦汎 岩手大学農学部獣医学科教授

消費者にアンケートをとると、74%の人が食に何らかの不安を感じ、特に農薬、輸入食品、添加物、汚染物質など、過去に大きな負のイメージがあるものが上位を占めている。

消費者は、食の安心と安全が一体に考えられている場合が多い。岩手県は食の安全・安心に関する基本方針として、消費者の視点、食に係わる人達の協働の視点、環境に関する視点を重視している。

食品を摂取することによるリスクは常にあり0ではない。危害の発生頻度が高く、重篤性の疾病を起すものは、絶対にコントロールしなければならない。O157はこれに該当するであろう。

リスクコミュニケーションは新しい概念であり、これから積み重ねられて、より有効的になっていくだろう。消費者は食品を正しく見て勉強し、行政や科学者は的確な情報を提供することが必要だ。

BSE検査は、決して牛肉の安全を全て確約するものではない。検査で異常プリオンが検出できるのは発病の約6カ月前で、それ以前は感染を受けていても検出できない。特定危険部位を特定し、的確に排除することが食肉の安全確保には重要である。

食肉検査は、食肉衛生検査所の獣医師により生体検査が行なわれ、異常のあるウシは病畜をと殺する場所へと殺解体される。と殺される牛はすべてBSEのスクリーニングを受け、陰性結果のものだけが市場に出る。検査の費用、それに係る人件費費は多額に上り、食肉の安全・衛生管理のための微生物コントロールやO157対策に影響を受けている。これらBSE全頭検査選択の妥当性について、消費者の視点からも再考する必要があるのではないか。

3. 「BSE（牛海綿状脳症）と、その食へのリスクについて」

金子清俊 国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第七部長

プリオン病は、伝達性海綿状脳症という人獣共通の感染症で、100%致死性である。ヒトの病気には、日本で年間約120人発症する孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病、脳外科手術による薬害ヤコブ病、食人習慣によるクールー、BSEによる変異型CJDなどがある。

プリオンたんぱく質には、正常型と感染型がある。正常型はすべてのヒトが持っており、非常に重要な働きをしていると考えられる。感染型になると抵抗性が強く、非常に強い処理をしない限り構造が壊れず、感染性が失われない。この分解抵抗性を利用したのが、BSEの検査診断法である。延髄のかんぬき部を使っているため、量がある程度たまらないと検出できない。

1986年に英国でウシのBSEが発見されたが、数百匹のヒト型のネズミを使った実験で1匹も発症しなかったため、ヒトに対して強い脅威として認識されていなかった。1996年にヒトの変異型CJDが報告され、世界中でパニックが起きた。数百匹のネズミで人口6000万人のリスクは予想できない。

脳、脊髄、目という高度感染性の部分だけで、感染力の93%ぐらいを占める。食の安全を確保する手段は、特定危険部位を除去して食べないことである。BSE検査は、感染牛の広がりを確認する手段とされてきたが、食物連鎖から感染牛を排除するためのスクリーニングの手段としても有効である。この2つが組み合わされて、初めて安心できるというのが日本の世論である。

日本でvCJDにかかるリスクは、孤発性CJDが年間120人発症するリスクに加え、0.0幾つ増加する。今の対応が続く限り、今後のリスク増加は考えられない。

第2部 パネルディスカッション

コーディネーター	中村	雅美	日本経済新聞社編集局科学技術部編集委員
パネリスト	品川	邦汎	岩手大学農学部獣医学科教授
	金子	清俊	国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第7部長
	入間田	範子	宮城県生活協同組合連合会常務理事
	大川原	潔	仙台牛たん振興会会長
	大友	学	古川農業協同組合肉牛部会部会長
	佐藤	正男	宮城県食肉衛生検査所所長
アドバイザー	外口	崇	厚生労働省大臣官房参事官
	姫田	尚	農林水産省消費・安全局消費者情報官
	西郷	正道	内閣府食品安全委員会事務局リスクコミュニケーション官

中村：コミュニケーションは、直流でなく交流、説得でなく納得である。十分な情報を得て、自己決定の第一歩としたい。

入間田：3年前のBSEの発生と今回とは、マスコミ報道も随分違う。牛丼がなくなるから並んで食べようという消費者の姿が、繰り返し映された。国の対応は、アメリカ産牛肉を輸入禁止にしたことは評価するが、国産肉のように、流通していた牛肉をすべて回収して、焼却処分にするとはなかった。消費者は、一切食べない家族、産直で安心な肉を求める人、最後の牛丼を幼い子に食べさせた人と、行動が多様化してきた。BSE問題の理解もさまざま。情報の取捨選択が難しい。

大川原：平成13年にBSEが出たときには、牛タンは安全な部位ですとしかいえず、風評被害で売

上げは半分以下に落ちた。今回は、ほとんど平常な状態だったが、商品確保が難しく、仕入れ値も3～4倍に上がっている。休業や廃業に追い込まれている業者もある。マスコミは、危険性だけでなく、安全な部分についても科学的見地から報道し、危険でない部分の輸入の早期再開について協力してほしい。

大友：平成13年の国内牛BSE発生後は、ヘタリ牛の映像が繰り返し流され、年末近くは、牛の価格は生産原価を割ってしまった。廃業も覚悟したが、年が明けて、生産から屠畜までのトレーサビリティシステムを構築し、4000頭近いウシに1カ月以内にタグをつけた。「狂牛病」という文字はかなりの影響力を持った。冷静に的確な病名をつけてほしい。

佐藤：獣畜は、屠畜場法に基づいた検査を経ないと、食肉として出せない。その検査は地方自治体が行う。現在、宮城県食肉衛生検査所は職員40名中、31名が獣医で、検査員として現場の検査に当たっている。

金子：イギリスのBSE感染牛の発生数との単純比較で、日本の変異型CJDの発症は0.02～0.06人と予測されている。ほかにも幾つかの試算があるが、いずれも正確に予想することは極めて困難だ。

品川：今日、日本はBSEに対応する衛生管理は十分できているので、vCJD発症数はもっと低いのではないか。

と畜場の衛生管理で、特定部位を排除するとき、2次汚染はないのか。

佐藤：屠畜場では、脳、目、扁桃を含めて、専用容器に入れて焼却に回す。脊髄は、背割り前にパイプを脊髄に通して吸引する。それでも不十分な場合は、背割り後も吸引する。のこズは、クズ受けがあって飛散しないようにしている。脊柱については、カットの時点で専用容器に入れて、産廃として搬出している。

中村：特定部位が新たに加わることは考えられるのか。

金子：現在のSRMで、九十数%の感染性がカバーされている。SRMの定義が大きく変わることはない。

品川：BSE検査費用は1頭当たりどのくらいかかっているのか。

外口：検査キット購入費、関連機器整備を含めて、32億9400万円の予算で、年間120万頭検査している。1頭当たり約3000円だが、これには人件費は入っていない。

入間田：全頭検査が科学的には安全の担保ではないという議論があるようですが、消費者にとって、安全と安心の大きな担保になっています。

大川原：我々が一番知りたいのは、アメリカの管理体制だ。

外口：検査に対する日米の考え方が違う。日本は直接的な安全対策の一環として行い、アメリカはむしろBSE対策の程度を確認するためのサーベイランスだ。

姫田：アメリカに調査団を派遣し、あるいは日米協議で具体的に意見交換をしている。次回はアメリカで行うので、現地を見て、詳しく意見交換していきたい。

中村：国際的な統一基準の見通しはどうか。

姫田：来年度、OIEで議論することになっている。

大友：OIEで腸を廃棄すると決めたそうだが、モツやホルモンはどうなるのか。

姫田：取り扱いを変更しないという厚労省大臣の談話が出ているので、心配ない。

会場：私は牛タン屋をやっているが、危険度の視点だけでなく、安全度の視点も強調して、SRM以外の輸入の再開をお願いしたい。

(4) 閉会挨拶 柿崎征英 宮城県副知事

「食品に関するリスクコミュニケーション（仙台）」
アンケートの集計結果

開催日：2004年6月8日（火）

参加者数：191名 回答数：84名（回答率44%）

問1	ご自身について、ご回答ください。		
1)	消費者	20	23.8%
2)	食品関連事業者	21	25.0%
3)	食品関連団体	5	6.0%
4)	研究機関	3	3.6%
5)	行政関係	29	34.5%
6)	マスコミ関係	0	0.0%
7)	その他	4	4.7%
	・農業団体		
	・飼料販売営業担当		
	・獣医師会		
	無回答	2	2.4%
問2	本日の講演会は、何からお知りになりましたか。		
1)	食品安全委員会のホームページ	10	11.2%
2)	食品安全委員会からのご案内資料	25	28.1%
3)	都道府県等自治体からのお知らせ	27	30.3%
4)	関係団体からのご案内資料	16	18.0%
5)	新聞折込みチラシ	3	3.4%
6)	知人からの紹介	6	6.7%
7)	その他	2	2.3%
	・農水省メールマガジン		
問3	国や地方自治体、業界団体等の行う食の安全に関する意見交換会や講演会などにこれまでどれくらい参加したことがありますか。		
1)	今回が初めて	28	33.3%
2)	これまでに1回	20	23.8%
3)	これまでに2回以上	36	42.9%
問4	本日の講演についてお伺いします。講演内容について、十分に理解することができましたか。		
1)	理解できた	23	27.3%
2)	だいたい理解できた	43	51.2%

3) あまりできなかった	12	14.3%
4) できなかった	4	4.8%
無回答	2	2.4%

附問4 - 1 (問4で「理解できた」「だいたい理解できた」と回答した方)

内容がわかりやすかった点はどこですか。当てはまるものは全てご回答ください。

1) 説明が明瞭で的確だった	31	38.7%
2) 資料内容が平易でわかりやすかった	24	30.0%
3) パネルディスカッションの討論内容が適切であった	13	16.3%
4) 適切な説明時間が確保されていた	6	7.5%
5) その他	6	7.5%

- ・足ばやに進められている(前半の部分)。
- ・危険部位の説明不足。
- ・金子氏の説明はわかりやすい。大川原氏の業者としての気持ちはわかったが、本質ではないと思う。
- ・品川先生の話し方が早くて聞きにくかった。(微生物の話を別な場で聞きたいです。)

附問4 - 2 (問4で「あまり理解できなかった」「できなかった」と回答した方)

内容がわかりにくかった点はどこですか。当てはまるものは全てご回答ください。

1) 講演内容が難しかった(説明に専門用語が多い等)	7	27.0%
2) 資料がわかりにくい	0	0.0%
3) 聞き取りにくい	5	19.2%
4) 適切な説明時間が確保されていなかった	5	19.2%
5) その他	9	34.6%

- ・説明に一部不鮮明であった。
- ・結論が明確でない。何が言いたいのか判らなかつた。
- ・資料に不足しているものがあつた。短時間に早口でおおざっぱな説明であつた。これだけの講師が揃つたのである。1日かけてやるべきであつた。金子先生の話し方、姫田さんの話し方はとてもわかりやすかつたです。
- ・説明の仕方がよくない先生が少しいた。
- ・会場で表示された図で資料の中に入っていない物があり、説明についていけない部分があつた。
- ・ねむくてたいへんでした。
- ・説明がわかりにくい。
- ・金子先生の説明はわかりやすかつたが、他の方の説明は概要あるいは広範になりすぎて、説明不足の感じがしました。
- ・品川氏の話は、言葉足らずでわからなかつた。やはりBSEの専門家カリスク分析の専門家に話をしてほしい。

問5 BSE問題について、どのようなことにご関心がありますか。ご自由にご記入ください。

- ・牛肉の輸入制限について。
- ・輸入再開
- ・輸入する牛肉については、全頭検査またはこれに近い安心・信頼できる検査を行っている国に限るべき。今のままでは、アメリカの輸入再開には反対です。
- ・プリオンのメカニズム。発症までに長時間あるとの事だが、BSEの原因か加齢が原因か明確に分けられるのか興味がある。
- ・アメリカで発生した時になぜ回収をしなかったのか。国内ではすべて回収をし、流通を整備したではないか。
- ・米国と日本の輸出入の相違点(牛肉)。
- ・BSE検査は30ヵ月齢でいいと考えていた。感染・発病の機序がわかっていないといえはそれまでだが、ゼロリスクを求めることはムリであるし、と畜検査の中で全頭検査はあまりにも酷である。調査、研究と、食の安全対策を同じレベルで論じるのはいかがか。しかし、日本の老齢牛のケースが解明されない限り、それは禁句である。アメリカの*もあり、今後BSE検査をどうしていくか、興味深い。
- ・このようなコミュニケーションを続けている限り、この国の畜産農業及び消費は減少を続ける。リスクの議論には、コストの議論も必要でないか。パネラーに流通関係及び作業現場が出てないのは何故か。キケンを知る限り、と畜場、カット場で働く人がいなくなるだろう。生産から消費までの現場を、そして、そこで汗をかいてる人々を思いやるべし。
- ・変異型BSEが人間に感染するリスクが弧発性CJDの発症率に比べれば数値的には問題とする程度なのかどうかはむずかしい。しかし、このデータのみを信じていいのかも疑問が残るが、実際に人間において実験することができないということをふまえた上で、他の要因を十分考慮したデータの公表を望みたい。
- ・今の日本の制度の中では最善と考えており、世界の体制とも考えている。100%安全がない以上、体制が安全であり、これ以上人間として出来る事って何なのか、信頼とはここにある筈です。余り感情めいた話はしない方がいい。
- ・BSEについて基本的な考えは理解できたと思うが、販売方法により、せき柱が産廃になったり、一般廃棄物になるということが理解できない。同じリスクなら同じ条件ではないか。
- ・リスクコミュニケーションに関する事。リスク分析の結果を受け、現状の検査体制等の検証を行い、その情報をいかに伝達し、適切なリスク管理を行うか。
- ・OIEでの小腸全体除去に関して、科学的根拠がないのに、モツを食べる文化であるから、という理由で許可を求めるのは不安がある。また、アメリカからの輸入について、今後の方向性が気になる所です。日本への輸出分だけでも危険部位除去等を確実にしてほしい。
- ・米国とのやりとりで見られるように、食の安全性が食文化・民族性と大きくかかわっ

ていること。

- ・リスクの低さについての認識はありましたが、金子先生の資料にある国内での年間発症可能性0.06人(BSE要因)は、食品安全委員会としての公式な見解でしょうか。パネルディスカッションで理解が深まりました。
- ・危険部位とその他の区別(特に今回のホルモン材料(腸))。
- ・輸入再開に向けて米国牛の検査の今後の体制について。
- ・BSEはいずれ終息へ向うと思うが、国内でのその対応(幕ひきの時期)はいかなることになるや。BSEだけでなく、食に関するこれまでの国の対応が国際的な面であわてているようで、もっと腰をすえた根本課題に取りくんでほしい。
- ・日本における食品・食材は100%に近く安全といえるものが無いと訊きます。過去においては、尚の事、不衛生であり、「食べる事」だけに意識があったものと思われる。現在の情報も「ほしい」と思う意思が強過ぎて、過剰な部分も有り得るのではないかもおもいます。その中で消費者が個々で選び進化していくものと思います。
- ・BSEの人間へのリスクと対策、及び国民の認識は他の原因による食品のリスクと比較してバランスはとれているのだろうか。すなわちリスクの度合いは適正なのかどうか疑問に思う。
- ・外国、特に中国など情報の入らない国の状況。
- ・BSEの検査方法はどれが日本として採用するのか。いつ米国、カナダ、ユーロの牛肉を解禁するのか。パーフェクトを望んでいたら、日本は世界中から取り残されてしまうのではないか。(BSEより危険なものが多くあるのに(「煙草」「農薬」「保存・着色料」)、何故これにここまで執着するのか判らない。)
- ・米国の状況について。
- ・ヒトへの感染。
- ・生産者の方との話の中で、BSEについて何を話していけばいいのか。飼料の配送、保管等をPRの一つとして考えています。
- ・BSEの感染部位に感心があったが、今後の感染部位の広がりにはまだ不明な点がある。研究が進められたい。
- ・畜産のあり方を見直し、国産の畜肉を大切に食べる食生活に戻したらどうでしょう(飼料のあり方、育て方、動物用医薬品の多用、受精卵クローン)。牛タンは大好きですが、牛タンの為に、アメリカ産輸入再開を急ぐ事はありません。アメリカ牛BSE輸入再開交渉について、めずらしく頑張っておられる現状を国民の一人として「がんばってね」と応援しています。マスコミは牛丼報道についてアメリカから金をもらっているようでしたね。消費者は食べない事で危険を回避しています。国内の畜産を国民から信頼されるものにしていただきたいです。用語集ありがとうございます。ゆっくり見させていただきます。
- ・行政の立場として、消費者の誤った疑問に正しく答え、安心を与えられる一助となればと思います。正しく伝えるには多くの知識が必要です。
- ・日本でのBSE検査体制が見直しされるやにきいてるが、どのようにしようとしているのか懸念。輸入分についても完全な適切なSRM除去(全頭)は不可欠。

- ・牛のせき柱を含む飼料・肥料などの取扱いはどうなっているのか疑問です。全頭検査や特定危険部位の除去が大切だと思うし、生活していくには安心・安全が一番だと思うし講演を聞いて少しは理解したものの、原因がわからないとゆうのは怖いと思います。
- ・マスコミ対応の正確性、情報伝達のスピード。食へ対するコンセンサスの周知、例えば牛丼騒動、未検査部位へ対するマスコミのアプローチの甘さ、国民健康に責任がなさすぎる。
- ・金子さんが指摘した米国で30ヶ月未満のSRMを除去しないという事実を始めて知った。全頭検査ばかりが報道され、このような問題については、情報がほとんどない。また、検査だけではなく、トレーサビリティの重要性も情報として伝えられてないのでは。
- ・危険な飼料を食べた牛はどこへ行ったのか？プリオンが感染元というが、どうして病気になるのか。潜伏期間は本当はどの位なのか。
- ・消費者がばくぜんともって。
- ・アメリカからの輸入再開について。再開にあたって、どこまで検査体制、危険部位除去を要望する予定か。また再開について、アメリカ国内でもより高度に処理する業者も出て来るし（輸出国対応として）可能性もあると思うが、そういった表示に関して制度化することがあるか。
- ・対策の費用対効果、科学的な検証、はっきり見せながら議論していく必要。
- ・BSEそのものがよく理解していないので。人間に対する危険性、いかにうつるのか？等。
- ・国内は全頭検査ということで安心しておりましたが、食品安全委員の中から、腸を全てきずることにより、その必要はない等の意見が出たことを伺いました。正確な情報を望みます。外国産の牛には、取扱い過程（処理時、二次汚染）での不安があります。いつまでも輸入ストップは続けられないと思いますので、これ等の対応も、正確に国民に知らせるべきではないでしょうか。
- ・BSEに関するリスクコミュニケーションについて、基本的な日本国内におけるBSEの認識と他国（EU・米国）のBSEに関する認識の差。安全・安心の認識確認。特定危険部位の除去が必要。全頭検査（日本政府の推し進めている）は必ずしも必要ではない。
- ・日本の現在の体制がどうなるのか。全頭検査は見直されるのか。
- ・肉牛を生産する酪農家の育成など（飼料、輸入国等）
- ・いつになったら安心して牛肉を食べられるかどうか。
- ・全頭検査の是非。いつまで続けるつもりなのか。
- ・全頭検査の必要性。年齢・種類により検査を限定できないか。
- ・日本、EU、米国の足並が揃っていない中で、いかに折り合いを付けるべきか、大国の力で米国が押し切るように思える。リスクを可能な限り最小限にできる方法を合意し（科学的に説明できる）世界中が同じ対応で検査することが重要である。日米の妥協ではなく、誰もが納得できる方法を検討していただくことを望みます。日本の世論

を理論的に説得できるシステムを考察してほしい。検査のシステム相違が問題でなく、特定部位の取扱いを一致させることが輸入再開への道になろう。

- ・ 米国産牛の輸入再開の話題で、急に「科学的な評価」がクローズアップされたが、米国の処理についての情報が不足している。報道のレベルでは、とてもすべて安全とも安心とも言えない。業者間の能力の差も含めて、この点について非常に関心がある。
- ・ 消費者の対応の多様性。情報はたくさん発信されているが、理解している人は少ない。(入間田さんも言っていたが。)もっとわかりやすい説明が必要なのでは。生産者からのアピールも必要。
- ・ 牛肉を食べてもだいじょうぶなのか？というほんとうにバクゼンとした心配しかなかったが、本日の講演を聞き、安心を得た。日本は衛生的に解体されると聞いているが、海外から入ってくる肉の衛生状態は調査されているのだろうか。「海外のと殺の実情とSRMの除去は。」
- ・ そもそも原因にかかる研究について。また今後もBSEのみでなく、未知の感染症があった場合のマスコミの正確な報道体制について、何らかの一定の情報のコントロールが必要ではないか。
- ・ BSE問題は心配の実であった。科学的な解明を望んでいたので、今回の勉強ですっきりした。
- ・ 特定危険部位の各部位の危険率。現在特定危険部位として挙げられている部位の除去方法。
- ・ 現在は米国産牛肉の輸入を禁止していますし、肉そのものについては消費者が食べる選択をできますが、たとえば肉エキス等に特定危険部位が隠れている可能性は日本では考えなくてよいのか…。廃棄する部位が多いほど、生産者は収入減につながると心配です。
- ・ 特定部位を取り除けば安全であるということは理解できるが、汚染しないで除去しているということを誰が証明するのか(特に輸入肉)。特定部位からタンとテールを除いているのは、どうしても理解できない。(神経の固まりではないだろうか。)
- ・ 飼料や肉骨粉が原因といわれているが、他に原因があるともいわれている研究、どこ迄されてるか発表してほしい。特定部位を除去することでしかBSE問題をのり越えることができないのか。
- ・ 米国の輸入再開と時期。飼料の原因追求。
- ・ 米国からの牛肉輸入がどのようになるのかという点です。講演で日本のやり方は、世界の常識とはならないという内容がありましたが、日本のやり方は世界基準に即して作られたのではなかったのかどうか。
- ・ BSEの致死率と食中毒一般やカゼの致死率の比較はどうなってますか。マスコミ報道はリスクだけの報道だけでなく、簡単な解説をしてもらいたい。英国人と日本人の食肉習慣の違いがあるのではないか。一連の動向から、行政の国民への的確な知識啓蒙、食生活の対応の指導が不足していると思われる。特にテレビ・新聞の活用を考えるべきと思う。
- ・ 人間に対する影響がどの程度将来にわたって与えるのか不安がある。国産に関しては

全頭検査が行われるので、ある程度安心ですが、輸入品についてもっと強化をしてもらわないと不安である。検査体制の実態をきちんと情報公開してほしい等々。

- ・アメリカのBSE発生問題とのからみで議論が科学から政治の方に行ってしまった感がある。OIEやヨーロッパのBSEはどうなっているのか知りたかったが、アドバイザーの話ですこし理解できた。
- ・リスクコミュニケーションの視点で考えれば、BSE対策としてはSRM部位の除去で十分なのではないのか。
- ・日米交渉の結論がどのようになるのか、静観しています。やはりBSE検査済の牛肉を輸入すべきである。
- ・リスクがどの程度あるのか。その程度をどのように理解し、他へ発信すればよいのか。全頭検査を行う意味があるのか。

附問5 - 1 上記の関心点について、今回の講演会は役に立ちましたか。

1) 大変役に立った	4	4.8%
2) 役に立った	36	42.9%
3) あまり役に立たなかった	15	17.9%
4) 役に立たない	3	3.5%
無回答	26	30.9%

問6 今回の講演会についてご意見・ご感想などございましたら、ご記入ください。また、リスクコミュニケーションに関するご質問・ご意見などもございましたら、あわせてご記入ください。

- ・特に金子先生の話は理論的でたいへんわかりやすかった。内容も興味深いものでした。
- ・地方で細やかな集りを多く開催した方が良いのでは。また、学校やPTAなどの集まりで講習会形式のものを行ったほうが関心は集まるのではないか。
- ・牛肉が前ほど食べられないのは特に不満ではないが、仙台牛たんが打撃を受ける事は今の仙台市民にとって関心が高いと思う。それがどうなるのかについては、あまり明確な説明がなくて残念。
- ・いろいろな考えがあっていい。皆、牛肉がすきだから、今日来た。時間は多少かかってもしょうがない。日本だけで解決できないのだから。BSEは食品の安全と家畜の病気の撲滅と2つある。プリオンの特異性が食べることから遠ざけている。
- ・リスク対コストをもっともっと議論すべき。
- ・今回の意見交換会はBSEを考える上でとてもよい参考となったし、アメリカのBSEに対する考え方をふまえて、これから日本の国がどう対処していくのかきちんと見守っていこうと思う。
- ・新しい課題が全員で解決するために努力した。ヨーロッパにもペスト事件があり改善をして来た。日本もこの徹を二度と踏まないためにも、もっと国のリスク管理が必要だと思う。金がないだけでなく、もっと先行投資をした方がいい。BSEは国の行政

の誤りにある。

- ・金子先生の話が非常にわかりやすく、現段階での科学的情報を聞いたことで、B S E についての理解が深まった。今後もリスクコミュニケーションでは最先端の専門家の話を聞きたい。この現状（危険部位除去でリスク減少やリスクの確率の低さ）などをマスコミなどを通し広めることも、大きな意味でリスクコミュニケーションであると思う。（今回も意見交換というよりも話を聞いているという感じであったが、それでもだいぶ考え方が変わりました。）
- ・話の内容が身近な内容となりおもしろかった。ただB S E に対し、時間をかけても日本の食文化を守っていける政策をとっていただきたい。従来は日本人はあまり肉を食わない民族で、国は必ずしも必要な食材ではないのではないかと、かといっても魚も食べなくなっているが。
- ・安全ラインと行政ラインは一致しているものでしょうか。「人」は衣・食・住が原則であり、その中でも「食」が一番大切な部分です。これからの未来が無理なく「食」が楽しめる事を。
- ・食べ物にリスクのないものは無いと思います。いやだと思ふ人は食べなければ良いのではないかと思います。
- ・安全 + 信頼が安心につながるが、このことを日本の消費者に定着させる施策の実行の必要性を感じた。
- ・消費者に対しての情報公開。消費者も意見を出し取り入れてもらう。未然に防止できるようなコミュニケーションをこれからすすめてほしい。
- ・HPがわかりにくいですネ。学者の方々がメインではなく、生産者の生活をもっと考えた内容があってもよかった。
- ・中村雅美氏のコミュニケーションとは 意見の交流 説得でなく納得である 自己決定には十分な情報の伝達があって始めて可能になるという前置きがとても納得できる言葉でした。リスクコミュニケーションが始まって日が浅いので、行政も消費者も慣れていないと考えています。いつも行政側の一方的な説得で終わってしまっています。また行政の好きな言葉に「自己責任」があります。消費者教育もこれから、という日本ですから、自己責任を負える消費者とは、行政の担当者くらいかもしれません。今後も気長に意見交換会を開いて、判断能力を養っていきたいと思います。行政には市民側の意見を取り入れる度量を養っていただきたいです。
- ・有識者、消費者、報道、行政と一同に介してのコミュニケーションは、専門用語も極力少なくわかりやすいものでした。また各界から各視点に立った話を聞くことができて楽しかった。
- ・プリオン病とゆうものの理解をしてなかったことが、金子清俊さんのお話を聞いて、少しはわかったように思います。SRMとB S E の違いもわかったように思います。マスコミの影響はあると思います。
- ・継続性、維持・反復の重要性、徹底が重要であると考える。
- ・消費者の責務といいますが、消費者には圧倒的に情報が少ないのではないかと。HPを見る人はほんのひとにぎり、行政はもっと積極的に情報を提供すべき。マスコミも不

安をあおるだけ。また、一面的な報道だけで正確な情報を提供しているとは思えない。なんとなく最後は「牛タン」のことで感情的な発言があった。理解できなくもないが、自分たちも学習すべきところはした方がいいと思う。

- ・マスコミが風評被害と言って伝えてくれなかったため、疑問に思っていたBSEの科学的な説明を聞いていくらか不安がうすらいだ。情報入手できるホームページを知ることができてよかった。
- ・もっと多くの消費者が参加できるような開催方法を検討していただきたい。特に専門的な知識を持たない消費者にリスクについてわかりやすく理解できる場を設けてもらえればと思います。
- ・専門用語を余り使わず、一般消費者にわかりやすく説明がほしい。
- ・リスクコミュニケーションがよくわからない。一方通行って感じがしました。
- ・国での肉の消費量が少なく、従ってBSEの危険率は少ないことわかりました。人手、金を別の微生物検査等に当てることも大切という話ですが、はっきり納得できません。米国でも30ヶ月齢以前の検査もする必要あると思います。
- ・いろいろな考えの人がいる。0.06人の発症率でも不安という考えにはビックリである。自然発病の方がはるかに多いのに…。安定した量が確保されて「食べられるという」安心が得られるのだと思います。もっとBSEの研究をしていただき、原因を究明していただき、検査しなくてもいいようにしてほしいです。
- ・意見交換会という要素よりは、むしろ報告会的な要素が強かった様に思う。パネルディスカッションにしてももっとパネラーと直接意見交換をできる場を提供すべき。小グループに分かれてのパネルディスカッションが最適。
- ・農水省担当官の発言はあまりにも一方的な意見である。全頭検査などという馬鹿げた体制をいつまでも続けられないことを知っていながら、食育などという全く異なった概念を持ち出し、あまつさえ、牛タンは食文化とは思わないなどというのは暴言以外の何ものでもない。仮に豪州でBSEが発生したらどうするつもりなのか。あり得なくはない。消費者は、ともすれば感情的になりがちであるが、科学的見地から冷静にリスクを語るべきであり、農水省の自画自賛など聞きたくない。米国产牛タン、牛肉は危険だから、輸入させないのだ、と科学的に言えますか？単に国内検査体制と整合がとれないだけの話であるのに、論点のすり替えである。
- ・質問に対する回答の時間を多くとって欲しかった。パネラーが多すぎる。パネラーが意見を出しすぎる。会場からの意見を取り入れてもらいたい。リスクコミュニケーションは双方向が基本であることをもっと認識していただきたい。
- ・初めて参加させていただいて、話が理解できました。ただし、意見交換ということからいくと、事前に について、 についてということ事前に参加者に知らせておくのもひとつのやりかたではないかと思いました。
- ・開催についてもっと広く事前に知らせる方法を検討すべき。一般の消費者らしい人が少ない。また、消費者の責務や役割というが、一般消費者が参加できて理解できるような意見交換会を、一定期間内に徹底的に行う必要があるのではないかと。農水省の姫田さんの発言は興味深くうかがいました(牛タンについて)。農水省の立場だから言

えたのかも。

- ・横文字がひんぱんにでていますが、それを理解して話していないのではないか。ムリに理解させようとして話して、よけい混乱する。宮城県で行うなら、それなりの地域性に配慮すべきでは。P Cの普及性等を理解して話をしてほしい。年寄りにH PをP Rしてもね…。司会もパネラーも要点を話すようにしてほしいのではないか。特に専門家の人々。次回は年令に関係なく、わかりやすい意見交換会をお願いしたい。
- ・パネリストが多すぎるのでは。会場との直接のやりとりがもう少し多いほうがよいのでは。S R Mの処理（と殺から食肉処理）の話が必要では（プレゼンテーションの中で）。肉骨粉の話も聞きたかった。
- ・パネラーとして、生産者、消費者、牛たん販売者、学識者となっていたようですが、宮城県には仙台牛というすばらしい牛肉があるわけですので、牛肉の販売者や、食肉市場関係者と畜業者（ミートプラント）の人達の意見も聞きたかった。
- ・パネラーの人選をもう少し考えてはいかがか。
- ・講演とパネルディスカッションの内容が重複していた。パネルディスカッションでは、違う内容で話をしてほしい。
- ・テーマが一つにしばられていたので、話題が消化不良にならなくてよかった。
- ・遺伝子組換え食品について、実際問題消費者の口に入っているはずであり、やはり報道やゼロリスクの考え方で、問題点ばかりがクローズアップされている。今後同じような、このような会合を期待します。
- ・開催の公開が遅いと思います。せっかくの開催なので、もっと早く告知して参加を募った方がよいと思います。
- ・さまざまな人々（消費者）がこういった意見交換会に出席できるようにしていただきたい。
- ・一般消費者へのP Rをもっとしたほうがよいのではないか。参加したくても開催を知らない消費者が多いと思う。参加したいという意見はいただく。
- ・アメリカ産牛肉の輸入禁止解除に向けての下地作りのための意見交換会ではなかったか。牛たんは安全性が確認されない限り、今後も輸入禁止でいいと思う。別に仙台の食文化ではない。一部の飲食店が勝手に仙台名物として騒いでいるだけの、いわゆるゲテモノ喰いであるだけである。振興会も急造した何の背景もない営利団体であることをもっと理解すべきである。仙台市民の食文化ではない！
- ・リスクコミュニケーションとは、関係者相互間の幅広い情報や意見の交換を行うことなのだそうですが、疑問点が出た場合、「どんな疑問が出て、どんな回答をしたのか」をわかりやすくホームページで取り上げられているのでしょうか。
- ・B S Eの感染・増殖ルートは昔から解っていたはずだから、国の行政対応がまずかったと思う。牛の肉骨粉は許可すべきでなかった。もしくは早期中止をすべきであった。一方、騒ぎすぎではないかと思われるところがある。研究解明には徹底してすすめ、消費者にはもっと解かり易く、安心出来る解説を、定期的に推進すべきでないかと思う。国の努力、皆さんの努力が伝わってこない。
- ・ある程度理解ができましたが、消費者として今後どの様して情報を得ていけるのか、

一般の消費者に対してどの様にして安心を提供していけるのか、消費者教育の充実を期待したいと思います。

- ・アドバイザーの話が一番よくわかったのは（皮肉でなく）、リスクコミュニケーションのあり方としてはちょっと残念です。一般消費者らしい人が少ない。
- ・食品のリスクコミュニケーションは、食品に対する新たな知見が出るたび、新しい用語や知識が必要になる。行政の情報提供のあり方が大切なのでは。行政は出してないけど、狂牛病の呼称や、キンメ鯛の水銀除去なども、あり方として問題だったりでは、正確な情報について、ジャーナリズムにも協力願ひ、広報する必要があります。
- ・もう少し消費者への呼びかけを行った方がよいと思う。そして率直な意見をじかに聞き、それに対してきちんとかたえるような状況をつくるべきだと思う。

問7 今後、食品安全委員会におけるリスクコミュニケーションとして行ってほしい取り組みは何だと思われますか。当てはまるものを全てお答えください。

1) 有識者による講演会（質疑応答含む）の開催	30	19.7%
2) 基調講演やパネルディスカッションを盛り込んだ意見交換会の積極的な開催	30	19.7%
3) 食品の安全に関する平易で基礎的な勉強会の開催	33	21.7%
4) 参加者全てが発言できるような、少人数の座談会の開催	7	4.6%
5) 消費者、生産者、事業者が意見をいつでも言える窓口の設置	27	17.8%
6) 地方における意見交換会の開催	22	14.5%
7) その他	3	2.0%

・マスコミの有効活用。マスコット、タレント登用、イメージUP。
 ・国民へのPR方法。
 ・今日の勉強を生産者に浸透させてほしい。

問8 今後の講演会や意見交換会で取り上げてほしいテーマは何ですか。当てはまるテーマを3つまで下記から番号でお答えください。

1) 残留農薬に関するテーマ	28	13.1%
2) 食品添加物に関するテーマ	21	9.8%
3) 遺伝子組み換えに関するテーマ	25	11.7%
4) 食品中に混入する汚染物質に関するテーマ	25	11.7%
5) 動物用抗菌性物質(いわゆる抗生物質)に関するテーマ	25	11.7%
6) 有害微生物に関するテーマ	11	5.1%
7) 輸入食品に関するテーマ	37	17.3%
8) 食品表示に関するテーマ	28	13.1%
9) リスクコミュニケーションに関するテーマ	14	6.5%

問9 このような講演会や意見交換会にご参加していただきやすい開催日時は、いずれですか。

1) 平日の午前	3	3.5%
2) 平日の午後(1~5時頃)	61	71.8%
3) 平日の午後6時以降	4	4.7%
4) 土曜日の午前	0	0.0%
5) 土曜日の午後(1~5時頃)	13	15.3%
6) 土曜日の午後6時以降	0	0.0%
7) 日曜日・祝日の午前	0	0.0%
8) 日曜日・祝日の午後(1~5時頃)	4	4.7%
9) 日曜日・祝日の午後6時以降	0	0.0%

問10 以下の食品安全委員会の取組みのうち、ご存知のものあるいは利用したことのあるものを全て選んで下さい。

1) 委員会、専門調査会の傍聴が可能なこと(原則公開とされていること)	27	13.8%
2) 委員会や意見調査会交換会等の配布資料及び議事録の公表 (食品安全委員会ホームページ上)	35	17.9%
3) 食品安全委員会ホームページ	41	20.9%
4) 食の安全ダイヤル	13	6.6%
5) 食品安全モニター	21	10.7%
6) 食品安全委員会の行うリスク評価案件に関する意見募集 及び寄せられた意見に対する考え方のホームページ 上での掲載	23	11.7%
7) 食品の安全性に関する政府広報(鳥インフルエンザ等)	35	17.9%
8) その他	1	0.5%

問11 ご自身の食生活について教えてください。

気をつけていることがありましたら、できるだけ具体的にご記入ください。

(例：加工食品は表示を確認し***の記載があるものを選ぶ。食中毒を防ぐために加熱、洗浄を充分にする。)

- ・食品表示について、もっと厳しく信頼できるものにしてほしい。
- ・できるだけ国内産にこだわって購入している。
- ・加工食品の原材料表示は見る事。合成着色料等を使用している食品を購入しないようにする。
- ・国内自給率の向上について、自分の食卓で考えている。このことを今後のテーマとし

て取りあげてほしい。

- ・できれば国産、できれば地元産の素材をおいしい時期に味わうことを考えている。特に子どもが嫌い(食べにくいときらう)魚や、野菜など素材のおいしさを知ってほしい。まちがっても食中毒にならないように、卵と肉は加熱を十分に、がモットー。
- ・食品添加物、農薬使用量の少ない食品を売っている店での食品の購入。
- ・地産地消に努めている。外国産の農畜産物には手を付けない様になっている。ビタミン量、添加剤等、輸入産物の内容が不明である。安価より安全に近いものに誘われる。
- ・表示をよくみる。賞味期限や原産国等。
- ・表示の確認。期限内の消費。十分な加熱。
- ・肉は国産のものを購入する。野菜等に関しても、なるべく国産のものを選ぶようにしている。
- ・野菜を多く摂ること。栄養バランスに配慮した規則正しい食事。賞味期限等、表示をうのみにしないで、自分の五感で大丈夫か否か確認すること。
- ・カロリー表示をチェックしています。(食生活でのカロリーコントロールが必要なので。)
- ・外国産の肉は購入しません。中国産の野菜も購入しません。畑で野菜をつくっています(栽培)。
- ・食品の歴史を確認。
- ・何でも食べます。好きなものを好きなだけ食べて。
- ・ほとんど気にしていません。人間本来の力を信じています。
- ・食品の表示内容について確認している。食品の保存方法についても適正に行うように気をつけている。
- ・産地、生産者が明記されている事。できるだけバランス良く新鮮な食材を使う。表示を見てから買う。
- ・生産者の表示。(自社のお客様の生産した商品を選択。)
- ・食生活に自分の国で、耳で情報を確認できる食材を利用したい。
- ・加工食品の表示により添加物を確認し、なるべく添加物等で不安に思えるようなのが入っている時は購入しない。
- ・地場産、国産を多用している。味噌は自家製、梅干、ラッキョ漬けなども自家製。私は魚食民です。旬のものを旬に食べるよう心掛けている。魚を中心の民として、養殖魚の育て方に不安を持っています。コメは生産農家から購入することが圧倒的に多い。また、季節四季を重視した食の作り方に大きな疑問を持っています。原材料を過程で煮、焼、炊くなど調理して食べることにしている。家庭菜園を始めた。
- ・季節感のある食材選び、輸入食品(特に野菜)は避けています。
- ・加工食品の表示確認、加熱、洗浄、その日に作った料理はなるべくその日に食すとか、食事療法している家族がおりますので、食料品にはとても神経を使っています。トレサビリティシステムが導入されるようになって、スーパーで買物する時は、利用するようにしています。
- ・報道記事の切抜き、スクラップ収集、番組への興味向上に努めている。今日の参加も

その1つである。

- ・多くの情報をできるだけ確保した、するようにしている。
- ・加工食品の表示は毎回ほぼ見ている。少しでもあぶないものは加熱する。まだ安全と確信できないので、牛肉はめったに食べない。
- ・肉類の十分な加熱。肉の色やつや。
- ・地場産のものを優先。
- ・食中毒をさける、菌をつけない、ふやさない。手を洗う。加熱する等。
- ・表示は確認しますが、字が小さくてだいたいしかわかりにくいので、一番は食品販売店の信用度を重視しています。
- ・食品の添加物表示方法について参考に買っている。
- ・表示をよく見て購入することにしている。
- ・消費期限の長いものを選ぶが、消費に際しても常に期限を意識して、保存に気を付けるようにしている。
- ・食材や栄養成分のバランス。特に野菜の種類と量。国産で間に合うものはなるべく国産を利用（自給率の問題があるので）。それ以外はあまり細かいことを「気にしない」ということに気をつけている。
- ・県内産を、その次は国産を食べるようにしている。旬のものを食べるようにしている。スーパーの産地表示はまちがいが多いので、袋に表示してある産地名をよくみるようにしている。産地表示は正しいのに、売り場でまちがいが多い。ひどい場合、ほうれんそうの所に小松菜が入っていたりする。
- ・なし。
- ・加工食品は正直わからない。加熱（電子レンジ）のみです。
- ・新鮮なものを購入し、なるべくすぐ調理して食べる。
- ・できるだけ地場、旬のものを購入（手作りを心かけている）。輸入食品についても原産国表示を見て購入。
- ・家庭で加工した物を主体とする。加工食品は出来るだけ食さないようにしています。
- ・産地の確認（できるだけ国産を選ぶ）。賞味期限の注視（できるだけ新鮮な物）。生産方法の確認（誰が、どんなふうになられたか気になる）。
- ・リスクをさける。
- ・製造月日、生産地等の確認。
- ・バランスを考えた食生活。そして適度な運動でしょうか。栄養素のみならず、全体のカロリー等も考慮している。

食品に関するリスクコミュニケーション（東京）
- 食品安全の新たな取組の1年とこれから - 概要

1. 日 時：平成16年7月2日（金）13：30～17：00
2. 場 所：日本青年館（東京都新宿区霞ヶ丘町7-11）
3. 主 催：食品安全委員会、厚生労働省、農林水産省
4. 参加者：208名（消費者、食品関連事業者、自治体関係者、報道等）
5. 議 事

（1）開会

（2）開会挨拶 寺田雅昭 食品安全委員会委員長

（3）参加者との意見交換

第1部 講演

1. 「食の安全と安心をめざして」

寺田雅昭 食品安全委員会委員長

健康のもとになる食品の安全、安心は、国民の最大の関心事だが、食品汚染や大量生産、グローバル化などにより脅かされてきた。国は、これまでの行政対応の反省に基づき、昨年7月1日、食品安全基本法を施行し、リスク分析手法を導入した。これは、リスク管理部門とリスク評価部門を分け、関係者相互のリスクコミュニケーションのもとに、リスクを低減する仕組みである。

同時に発足した食品安全委員会は、最新の知見に基づき、客観的、中立、公正にリスク評価を行う機関で、専門調査会による食品健康影響評価、食品安全関係の規程の整備、リスクコミュニケーションの実施を行っている。BSEに関しては、全頭検査のデータ分析を進め、日米会議にはオブザーバーとして参加している。

リスクコミュニケーションは、国民の信頼を得ることが第一である。消費者が不安に思う発がん要因と実際の原因との乖離は、リスクコミュニケーション不足の証拠である。安全は客観的な判断で、安心は個人の主観的な判断による。安全に加えて、信頼を得るように努力している。

食品安全委員会は2年目に入る。行政や企業の依頼だけでなく、委員会として問題点をとらえて評価をしていきたい。また、リスク分析の枠組みが国民の理解を得られるよう、リスクコミュニケーションの手法そのものを工夫したい。

2. 「欧州における食品及び飼料のリスク分析と欧州食品安全庁（EFSA）の活動」

ヘルマン・コエター 欧州食品安全庁（EFSA）副長官

EFSAは、BSE問題の発生に伴い、2002年11月に設立された独立国際機関で、食品及び飼料の安全性に関する科学的アドバイス及び技術的支援を、各国政府だけでなく、利害関係者に提供する。最高機関は14人のメンバーで構成されており、加盟各国を代表するものではない。カルフル社長、学者、消費者など、多様な背景を持つ専門家が選ばれている。チェック機能として、公開諮問会議が置かれている。

リスク管理は他の組織が行っており、リスクコミュニケーションは各省庁が行っている。EFSAは、リスク管理に資する提案も行っている。

EFSAは、8つの科学パネルを持ち、パネルの座長と科学者による科学委員会がある。科学的業務としては、課題に対する科学的意見の提供、リスク評価の提案の作成、特定のリスク要因及び疾病の監視などを行っている。

BSEのリスク評価においては、検査及び検査方法の検証を行った。ヨーロッパでは、30ヶ月齢

以上の牛を検査することとしているが、多くの国が100%ではなく、70%以上の検査を行っている。輸入国に関しては4つに分類し、0.02%のモニタリングしかしていないアメリカからの牛肉の輸入は禁止している。

E F S Aは、いろいろな機関と協力して科学的意見を出し、透明に、かつ、一般の人にわかるように伝達している。今後は、科学者の世界的なネットワークを形成することが必要だ。検討すべき課題は多いが、一定の基準で定めた優先順位で対応していく。

第2部 パネルディスカッション

コーディネーター	合瀬 宏毅	日本放送協会解説委員
パネリスト	ヘルマン・コエター	欧州食品安全庁副長官
	寺田 雅昭	食品安全委員会委員長
	高野 ひろみ	全国消費者団体連絡会
	能勢 稔	伊藤ハム(株)取締役
	西島 基弘	実践女子大学教授

合瀬：昨年、食品安全委員会が発足し、食品安全行政が1つにまとまり、消費者を含むそれぞれの役割が位置づけられた。BSE、鳥インフルエンザ、コイヘルペスなどが発生し、この新たな仕組みが試された1年について、感想を伺いたい。

高野：食品安全基本法第9条に消費者の役割がうたわれ、食品安全委員会の専門調査会にも消費者代表が入り大きな関心を持って意見も出してきた。ただ、まだ行政側も消費者もなれていない。このシステムによって、不安が本当に解消されたとはまだいえないと考えている。

能勢：米国のBSE発生だけでなく、食の安全の問題は続いて起こっており、いまだに問題は続いている。食肉業界は、食品安全委員会に大きく期待している。鳥インフルエンザ問題では、食品安全委員会の存在に助けられたと思う。

西島：安全に関してはある程度達成されているが、安心に関しては、官庁や学者の努力が、一般の消費者にわかりやすく伝わっていない。

合瀬：消費者は、どこに不安を持っているのだろうか。

高野：消費者も千差万別だが、よくわからないものに対する不安は共通して強い。

西島：食品添加物のかん水についてのアンケート調査でも、かん水に関する知識のある人は許容度が高かった。BSEの全頭検査は、国民に安心感を与えるには必要であった。今後は科学的な知識を消費者になるべくわかりやすく説明することが大きなポイントだ。

能勢：商品のマーケティングは消費者の情緒に訴えるものなので、企業者としては、安心ですといわざるを得ないが、共通言語はやはり科学である。リスクコミュニケーションが進めば、対話ができるようになるだろう。

合瀬：消費者の日欧の相違点をどう考えるか。

コエター：リスクをどう認識するかと、本当のリスクは異なる。例えばヨーロッパでも、遺伝子組換え食品について、国によってもリスクの認識が異なり、科学的知識でなく、情緒的な反対が多い。科学的なリスクを説明することは非常に難しい。科学者だけでなく、専門知識のあるコミュニケーターを育成して、説明してもらうことが必要だ。

消費者は無知ではない。我々は全員消費者である。リスクがあると知りながら、リスクをとる人間はいる。そこで、科学者はリスクを評価し、食品の小さなパッケージからでもわかるように消費者に伝えて、判断は消費者に任せるべきだ。

能勢：日本では、BSE牛発生時のニュース映像のホルスタインのイメージが強く刷り込まれている。メディアの対応も考えるべきではないか。

合瀬：BSEがヨーロッパ全土で見つかったのは、ヨーロッパで検査方法が確立したからだ。当時、日本は大丈夫だという当局の危機意識のなさをマスコミは問題にした。あの映像はわかりやすかったので多く使われたが、そういう時期を越えて、今の報道のあり方になっている。今は使わない。

寺田：消費者の買い控えや風評被害は、タイムリーな正しい情報提供で少なくすることができる。しかし、わかりやすいといっても、「絶対大丈夫だ」という言い方は、信頼感を損なうことにつながる。映像の影響力は非常に大きいですが、これに対しても、やはり早めの情報提供が必要だ。

合瀬：鳥インフルエンザでは、鶏を袋に詰めるシーンが消費行動に強い影響を与えた。欧州では、食品に関するニュースを消費者はどのように受け取っているのか。

コエター：欧州においては、EFSAが食品リスクを評価し、欧州委員会に出し、ウェブページで公表する。国家当局に出し、プレスリリースもする。各国の食習慣は違うが、なるべく調和した形で出す。クリアな情報は、プレスに取り上げられやすい。

合瀬：現代は「科学＝幸福」というよりむしろ「科学は何だか気持ち悪いもの」に繋がっていないか。科学を正しく理解してもらうのはどうしたらいいのか。

西島：お昼の健康娯楽番組のように、マスコミにも問題がある。また、それを指摘する人がいないのもおかしい。国は、管理栄養士養成などにおける食品安全教育体制をもっと真剣に考えるべきだ。

合瀬：マスコミは視聴者の鏡とも言える。消費者の理解が進めば、極端な報道は少なくなるのではないだろうか。

高野：視聴者は、バラエティーと情報番組は切り分けて見ているのではないか。情報を正しく提供する努力を続けて欲しい。

コエター：消費者に情報を届けるには、マスコミだけに頼ってはいけない。欧州では、利害関係者を最初からプロセスに取り込み、評価し、議論し、さまざまなコミュニケーションをしている。

能勢：日本国内だけでもいろいろな利害関係者がいて、コンセンサスづくりは難しい。EFSAは25カ国もあって、どのようにコンセンサスを形成しているのか。

コエター：簡単なことではない。利害関係者を取り込むといっても、科学的な議論に参加してもらうわけではない。議論は独立した科学者が行う。国によっても違いがある。我々ができるのは、透明な科学的メッセージを正直に伝えることだけだ。

寺田：EFSAの理事会と科学委員会はどのようになっているのか。

コエター：理事会は科学的意見は出さない。作業計画、予算、政策の承認などを行う。

合瀬：牛肉輸入再開をめぐる日米会議について、全頭検査も含め、お考えを聞きたい。

高野：今の検査体制があつた時期の日本の混乱を収束するために必要だったと理解している。消費者団体も全頭検査だけを求めているわけではない。検査の限界があるという報道に対して、全頭検査を直ぐ変更してよいということにはならない。問い合わせってくる消費者にも様々な意見はある。

能勢：関係者の納得の得られる形で、一日も早く解決してほしい。アメリカの輸出用牛肉は18カ月～二十数カ月で、その月齢のウシではプリオンはないと一般的にいわれている。そういう点について、アメリカ側からもっと説明されるべきではないか。

西島：全頭検査は、国民を安心させるという点で意味があつた。しかし、今後も国費を使ってやる必要があるのか。食品安全委員会が、政治とは切り離して、科学的な情報をしっかり出すべきだ。消費者は、多少の反発はしても、国の情報は重要視している。

合瀬：ヨーロッパで70%しか検査していないことは、国民に知られているのか。

コエター：OIE（国際獣疫事務局）で生体牛の新しい検査方法を検討しているが、まだ出ていない。現在確立された方法で70%検査すれば、そのリスクは許容範囲と考えられている。ドイツは100%検査している。オランダは70%検査している。各国の文化的な違いがあるが、各国民がそれぞれの体制を受け入れている。

寺田：プリオン専門調査会の検討を待って、日本のBSE対策の科学的評価をできるだけ早く出したい。

会場：食品安全委員会の委員と農林水産省の委員が同じで、独立性が保てるのか。

寺田：プリオンの専門分野の研究者が少ないので重複しているが、座長、座長代理は重複しない人を選んでいく。管理サイドとは審議内容も異なり、独立性を保っている。

会場：消費者がリスク評価してもらいたいときは、どうすればよいのか。

寺田：非常に歓迎する。ぜひ「食の安全ダイヤル」に連絡してほしい。それ以外にも、消費者の意見をいただきたい。

会場：SRMを除去すれば安全である牛肉を、なぜ輸入しないのか。

厚生労働省（広瀬）：今、まさに日米両国の専門家同士で検討している段階で、日米両国の合意に至っていない。結果については、適宜、国民の皆様にお知らせしていく。

会場：BSE問題の終息はいつごろと考えているか。今後、感染牛が出たらどのように対応するのか。

農林水産省（姫田）：潜伏期間の7～8年間とみられ、感染牛が出なければ終息になる。感染牛については、過去においても完全な隔離、焼却を行っている。

会場：鳥インフルエンザ発生時、「日本の鶏肉・鶏卵は安全」と書かれたチラシ（食鳥協会）があり、「肉・卵は安全」といっている中で、これでは消費者の混乱を招くのでは。

農林水産省（姫田）：鳥インフルエンザに関しては、ヒトへの感染でなく、トリへの感染を予防するために輸入停止、焼却したことをかなり説明した。全国有力紙でも自発的に解説を掲載していた。我々もホームページなどで情報提供を行っている。

合瀬：ある出来事から一定の時間がたたないと、我々はそこから学ぶことができない。人の気持ちはすぐには切り変わらない。消費者も事業者も、時間のファクターを考えて、対応していただきたい。

（４）閉会挨拶 寺尾允男 食品安全委員会委員長代理

「食品に関するリスクコミュニケーション（東京）」
アンケートの集計結果

開催日：2004年7月2日（金）

参加者数：208名 回答数：112名（回答率53.8%）

- 問1 ご自身について、ご回答ください。
- | | | | |
|----|---------|----|-------|
| 1) | 消費者 | 19 | 16.9% |
| 2) | 食品関連事業者 | 48 | 42.8% |
| 3) | 食品関連団体 | 18 | 16.1% |
| 4) | 研究機関 | 2 | 1.8% |
| 5) | 行政関係 | 15 | 13.4% |
| 6) | マスコミ関係 | 4 | 3.6% |
| 7) | その他 | 6 | 5.4% |
- ・経営コンサルタント
 - ・外食
 - ・食品安全モニター
 - ・他業界団体 など
- 問2 本日の講演会は、何からお知りになりましたか。
- | | | | |
|----|-----------------|----|-------|
| 1) | 食品安全委員会のホームページ | 73 | 63.5% |
| 2) | 食品安全委員会からのご案内資料 | 18 | 15.7% |
| 3) | 都道府県等自治体からのお知らせ | 0 | 0.0% |
| 4) | 関係団体からのご案内資料 | 7 | 6.1% |
| 5) | 知人からの紹介 | 3 | 2.6% |
| 6) | その他 | 14 | 12.1% |
- ・食肉関係の業界紙より、食品安全委員会HPへアクセス
 - ・食品安全モニター会議
 - ・農水省プレリリース
 - ・農水省のメールマガジン（5）
 - ・農水省ホームページ（報道発表資料）（3）
 - ・食の安全トピックス
 - ・業界紙
 - ・インターネット
- 問3 国や地方自治体、業界団体等を行う食の安全に関する意見交換会や講演会などにこれまでどれくらい参加したことがありますか。
- | | | | |
|----|---------|----|-------|
| 1) | 今回が初めて | 17 | 15.2% |
| 2) | これまでに1回 | 9 | 8.0% |

3) これまでに2回以上 86 76.8%

問4 本日の意見交換会全般についてお伺いします。内容について、十分に理解することができましたか。

1) 理解できた	27	24.1%
2) だいたい理解できた	63	56.3%
3) あまりできなかった	13	11.6%
4) できなかった	1	0.9%
無回答	8	7.1%

追加問4 - 1 (問4で「理解できた」「だいたい理解できた」と回答した方)

内容がわかりやすかった点はどこですか。当てはまるものは全てご回答ください。

1) 説明が明瞭で的確だった	30	24.6%
2) 資料内容が平易でわかりやすかった	37	30.3%
3) パネルディスカッションの討論内容が適切であった	36	29.5%
4) 適切な説明時間が確保されていた	10	8.2%
5) その他	9	7.4%

・司会が上手だった。(2)

・知っているから。

・パネラーができるだけわかりやすい言葉をつかう努力をしていた。

・講演時間をもっと長く。

・BSEの討議、質問への回答など、質疑応答は評価できる。

・内容が平易であった。

など

追加問4 - 2 (問4で「あまり理解できなかった」「できなかった」と回答した方)

内容がわかりにくかった点はどこですか。当てはまるものは全てご回答ください。

1) 講演内容が難しかった(説明に専門用語が多い等)	3	10.3%
2) 資料がわかりにくい	3	10.3%
3) 聞き取りにくい	7	24.1%
4) 適切な説明時間が確保されていなかった	7	24.1%
5) その他	9	31.0%

・ヘルマン・コエター氏の講演はもう少し時間がほしかった。

・委員会の役割、存在理由はわかった。しかしBSE問題は農水省の問題。本音が出ていない。このメンバーでは難しい。

・全体として、意図していることが何かわからない。

・一般傍聴者を募って3省庁名で開催した趣旨、目的意識が何処にあるのか、さっぱり理解できない。食安委の内部会議レベル。

・リスク管理に評価は必要だけど、その後どうすべきか、その先に何かあるのかを知りたかった。

- ・ヘルマン氏の説明時間が短かった。
- ・論点がぼやけていた。説明の趣旨がわからない。

など

問5 食品安全に対する新しい取組みがはじまって1年が経ちました。この1年間で、自治体や政府の食品安全に対する取組みが変わったと感じられますか。又、食品安全に関するあなた自身の考え方や行動など、何か変わったことがありますか。当てはまるものをすべて選んでください。

《自治体や政府の取組みについて》

- | | | |
|--|----|-------|
| 1) 食品安全に関する情報をこれまでよりも多く得られるようになった。 | 87 | 22.4% |
| 2) 問い合わせや相談の窓口が利用しやすくなった。 | 18 | 4.6% |
| 3) 政府や自治体の食の安全に関するホームページが以前より見やすくなった。 | 41 | 10.6% |
| 4) リスク管理とリスク評価が分かれたことにより手続きが複雑になり、わかりにくくなった。 | 8 | 2.1% |
| 5) 市民や住民、事業者との意見交換がよく行われるようになった。 | 25 | 6.4% |
| 6) 事業者の衛生管理や品質管理に対する監視や指導がより強化された。 | 39 | 10.1% |
| 7) 自治体や政府の取組みについて、特に変化を感じられない。 | 12 | 3.1% |

《あなた自身について》

- | | | |
|---|----|-------|
| 8) 食品を購入したり、食べたりする時に、安全性を意識するようになった。 | 35 | 9.0% |
| 9) 食品安全について、家族や知人と話すことが多くなった。 | 48 | 12.4% |
| 10) 安全性が不安な食品について、情報を得て、自分なりに安全性を考えるようになった。 | 30 | 7.7% |
| 11) 食品安全行政のしくみが変わり、以前よりも安心できるようになった。 | 18 | 4.6% |
| 12) 自分自身について、特に変化は感じられない。 | 24 | 6.2% |
| 13) その他(上記の選択肢以外) | 3 | 0.8% |

- ・情報は多く入るようになったが、整理されていないと感じる。
- ・無用な施策も増えた。たとえば農水のトレーサビリティ。厚生の特レサの考え方に統一すべき。
- ・今までは厚労省と農水省のみを注意すればよかったのが、3省になり、コンプライアンス上、大変になった。

問6 問3でこれまで参加した意見交換会や講演会が複数回ある方にお聞きします。過去1年間でご自身が参加して一番良かったと感じた意見交換会や講演会を1つお書き下さい。(主催者は問いません)

- ・ 昨年9月頃に開催された 政府 BSE 調査検討委員会から誕生した食品安全基本法制定までの経緯
- ・ 昨年12月頃に開催された 輸入食品の監視指導計画案に関する意見交換会「大阪」
- ・ 2月頃に開催された 鳥インフルエンザワクチンについて
- ・ 4月頃に開催された BSE に関するリスクコミュニケーション
- ・ 5月頃に開催された 牛肉シンポジウム
- ・ 5月頃に開催された 食品リスクコミュニケーション
- ・ 5/18に開催された 食の安全・安心シンポジウム「恵比寿ガーデンルーム」
- ・ 5月頃に開催された 食の安全に関するパネルディスカッション。酒井ゆきえさんが司会。
- ・ 6月頃に開催された 恵比寿ガーデンプレイスで行われたパネルディスカッション
- ・ 6/30に開催された 残留農薬に関するリスクコミュニケーション
- ・ 食品表示に関する合同会議
- ・ 6月頃に開催された 食品安全モニターの講演会
- ・ 6月頃に開催された 厚生、農水、リスクコミュニケーション「三田共用会議室」

問7 今回の意見交換会についてご意見・ご感想などございましたら、ご記入ください。また、リスクコミュニケーションに関するご質問・ご意見などもございましたら、あわせてご記入ください。

- ・ マスコミの言い訳の場になりすぎて残念である。パネリストは一種のコミュニケーターであるのであるから、科学的な内容を正しく我々に伝える努力をしてもらいたかった。BSE以外にも、食の安全性に関してもっと優先度の高いリスクが存在する。BSEばかり騒ぐのはいかなものか。
- ・ 各分野での本音に近い言葉が聴けて良かった。
- ・ 委員長の顔がよくみえて来た。今後は各委員とも持ち所をPRして下さい。
- ・ 十分リスク分析・評価がなされていないものまで規制し、後に事件とすることはさけてほしい。
- ・ BSEは過剰反応だと思う。マスコミが作りあげたもので、大変な損失を出している。もっと重要な事にお金を使ってほしい。
- ・ 重要な点が大きく二つあるように思われますので、今後積極的に行って頂きたい。食品安全情報のわかり易い伝達。食育・食の安全に関する教育。
- ・ この一年は、食品安全委・事務局・農水・厚生関係者にとって大変な一年であったことと思います。同時にこれはリスクコミュニケーションの始まりであり、これを良く拡大し染めていく必要があると思っています。その為には、より効果的に送り手と受

- けて間の理解のあり方を改善することが重要であり、認知心理学、社会心理学に於ける専門家の出席、サポートが必要と考えます。
- ・会場が良くなかった。ノートがとりづらい。椅子がかたい。おしりが痛かった。そのあたりを配慮して下さい。荷物のやり場にも困った。
 - ・食品安全委員会自体を国民に認知させるコミュニケーション不足と感じる。それが第一では。
 - ・事前に質問を収集し、まとめてご説明されたらどうかと思います。
 - ・「消費者の声・意見」とは何かについて考えさせられました。 広く国民の声をひろい上げるシステムが必要と思われまます。「食育」の重要性を再認識しました。
 - ・食品安全委員会の役割について、リスク評価の内容がどこまでどのように各、その管理、実行する省庁の行政に反映される効力があるのか。 勧告の限界。
 - ・意見交換の時間が長くてよかった。
 - ・このような機会は今後も継続して、国(行政)の考えを消費者に伝えていただきたい。
 - ・リスクコミュニケーションという言葉がとっつきにくくていけません。わかりやすい平易な言葉にならないものですか。
 - ・今回はリスクコミュニケーションという、食品全体をいろいろな角度からということなので、今後はBSEというような具体的テーマについてやるべき。
 - ・これまでの取組、考え方については良く判った。「～これから」という演題なので、1年の総括と今後の取組について聞きたかった(3行政機関)。後半のパネルディスカッションは非常に良かった。
 - ・総論に終始した感がある。
 - ・一般消費者からのアンケートなどもっととって意見に反映すべきでは。大学教授などとのつながりがあるならば、若者へのアンケートなども容易にとれるはず。消費者団体では若者の意見を反映できていない。もっと広い所から意見を。意見をえるのは受け身ではいけない。ホームページなどは関係者しか見ないので、自ら意見を求めて下さい。
 - ・会場がせますぎる。
 - ・ヘルマン・コエターさんのお話を全部聞きたかった。BSE検査について米国牛を購入していないのは、知りませんでした。
 - ・情報提供の難しさ、表現力、見せ方等にまだまだ努力不十分です。わかっている人はもっと上手に伝える努力が必要なのではないでしょうか。
 - ・会場がせまい。世界的なリスクコミュニケーションでの場の連合会議の成立。
 - ・安全委員会の1周年記念パネルディスカッションとは言え、メンバーの選任も問題あり。
 - ・一般の人にとって“リスクコミュニケーション”という言葉は非常に分りにくいと思います。「食品安全への人々の理解を深めよう」と考えるならば、この辺から直していく必要があると思います。パネルディスカッションの人選(含むコーディネーター)は適切であったと思います。他の講演会より、この点は良かったと思います。
 - ・今回のパネルディスカッションが最もわかりやすかった。よく理解できた。

- ・パネルディスカッションがおもしろかった。わかりやすかった。緊急性のあるリスクについてのみで終わったように思いますが、そうでないものについても、またこういった形で聞くことができたならよいと思いました。
- ・食の報道は正しくあってほしい。必要以上に消費者を迷わせているのではないか。
- ・会場が悪い。スクリーンが後の席からは見えない。大人数であればきちんとスクリーンが見えるような会場にしてください。参加ハガキの地図もわかりにくい。駅からどれ位かかるのか、もう少し説明があっても良いのでは。会場からの意見をとり上げる時間を増やしてほしい。コエターさんのお話ももう少し聞きたかった。
- ・行政、マスコミの発表への不信。
- ・コエター氏の時間、30分では明らかに不足。もっと聞きたかった。通訳は良くない。パネルディスカッションは、いつも今日くらいの活発さが欲しいです。
- ・今回EUの説明ははっきりしなかったが、BSE関係の質疑応答は非常に良かった。
- ・ずいぶん前に参加したときは、安全委・厚労・農水の説明だけで終わっていたが、今日はコーディネーターをはじめ様々な立場の方のお話がきけておもしろかった。コエター氏の講演の中で、消費者が理解することがリスクコミュニケーションだのようなことがあったかと思えます（確か）。日本でもぜひ行って行って下さい。情報を出したというだけになっているような感じもします。
- ・全般的に抽象的。焦点が定まらなかったような印象。
- ・今回のパネルディスカッションは聞いていて面白かったが（特に後半のBSEはタメになったが、それを別とすると）、今まで何度かこの種の意見交換会を聞いた時と同じで（1年たっても同じで）、いつも同じような具体性に乏しい概念論に終始している。入口論に止まらず、何に対してコミュニケーションを構築したいのか、テーマを各回毎に明確にした上で論議して頂きたい。参加者の判断基準のバリエーションが広がるように！後半のBSE討議のように！
- ・業界としては、リスクコミュニケーションに理解が進んでいると思いますが、消費者団体（一般消費者）に対してもっと理解を求めべき。その後に、消費者の選択の権利に任せてもかまわないのでは。
- ・パネルディスカッションの日米BSE問題の部分。もし進行にシナリオがなく、コーディネーターに進行をまかせていたのであれば、やはり一番思い込みが激しいのはマスコミであり、リスクコミュニケーション分析手法のプロセスについての理解と、行政からのトレーニングが必要ではないか。今日のやりとりは、スクープを取りたいための芸能レポーターとほとんど振る舞いが同じだった。
- ・安心に関わるマスコミの責任は非常に大きく、コーディネーターがマスコミ関係者であるのは好ましくない。
- ・BSEの発生以降、各国はリスク管理を模索しているところであり、今回の講演で類似の展開が図られていることを感じた。今後も国際的な歩みよりとともに、各国文化の違いという科学的評価以外の観点をふまえながら、審理を進めるべきと考える。
- ・リスクコミュニケーションが必要となった本当の理由は何でしょうか。今後の人口増加～食料の安定供給問題などを見越し、これからのあきらかになるリスク等を業界各

- 社、消費者、行政に対して提言する組織になって欲しい。
- ・もう少しE F S Aについて聞いたかった。やっぱり時間が足りなかった。
 - ・寺田委員長自らが質疑応答することに好感を持った。司会進行、各パネリスト、質疑といい感じを持って終わったと思う。最後のあいさつは簡単に。
 - ・何よりも大事な点は、一般の人に分かりやすい言葉でやり取りすることで、比較的その点では良かったのでは。
 - ・各業界の意見がきけて参考になった。マスコミの対応、報道の仕方については考え直すべきではないかと考える。
 - ・Mediaを活用した広報活動が必要。今回の活動を報道に依存するのではなく、積極的に外に向けて流すべき。さらに生産者をも含む食と農を合わせた日本の食の問題に発展させよ。(自給率の向上が安心の増大のひとつでは?)
 - ・公聴会と同じで、行事として実施しているだけの感がある。
 - ・肝心なところはハグレが悪い。
 - ・リスクコミュニケーションのバージョンアップの見通しを示しながら、現時点で行いうるコミュニケーションを遂行する必要がある。意見を聴く、情報を与えるというレベルから、いっしょに考える、いっしょに決めていくというレベルアップを行うことが重要と考える。
 - ・科学的根拠に基づいて判断することは、原則的・根元的に必要で重要なことです。評価も管理もここからぶれてしまっはいけないと思います。
 - ・本日のテーマはしかし、科学的判断だけで措置したのでは、消費者は安心しないというものでした。それを解きほぐすヒントは、安全 + 信頼 = 安心です。信頼がゆらいでいるから、ゆらいだから安心できない状態が続いているのです。ここをごまかしてしまうと過去のあやまちをくり返すことになります。
 - ・不信を招いたのは何だったかの認識が一致していないと感じます。現在、農水・厚労省の信頼の回復はその途上です。米政府の押しつけとも強引とも映る解禁の要求の執拗さも、不信の種です。米の検査、と蓄場、トレーサビリティ等のずさんさも不信の元です。信頼は元々あるとの前提で対処すれば、二重の信頼喪失になっていくことを肝に命ずるべきと考えます。
 - ・まずやらなければならないのは、上記のような信頼を損ねている事態を誠実に受けとめ、信頼回復のための仕事、作業、努力をすることです。全頭検査の無意味さを前面に出して、信頼回復の取組を回避してはならないと思います。
 - ・コエター氏以外の方々の話が聞きとりにくいことが多かった。コミュニケーションには当然、こうした会での「話し方」等も大切な要素なので、出席者の選考等、留意して頂きたい気もしています。
 - ・寺田先生：お立場上からか、なかなかはっきり言って頂けない点が少しもどかしいです。Dr. コエター氏のお話、特にパネルディスカッションで特にわかり易かった。能勢氏のマスコミの取り扱いに対する意見は、消費者側から見ても不安が増すことは確実でした。政府の対応等、具体的コメントをきちんとはっきり取ってほしいと思いました。

- ・ 本人の意見交換会でもあった通り、消費者とのリスクコミュニケーションとして、Webでの情報公開や会の開催だけでは特定の消費者（積極的消費者）とのコミュニケーションではないでしょうか？NHKで情報（食品安全委員会の活動）を提供（定期的に）してもらえれば、消費者のすその広がるように思います。これからも食の安全のために、公正な立場でリスク分析、評価をお願いします。今回の題目と、後半の（BSE）話題が少しずれてしまったようで、関心の高さは分かるのですが、それは別のリスクコミュニケーションで取り扱っていると認識しています。コーディネーターの方も、BSEの話を取り入れながらも、題目とはずれないようにしてほしいです。
- ・ 机のある会場が好ましい（メモをとりにくい）。欧州の講師の講演はもっと長時間とる配慮がないと失礼と思う。（なぜ急かせるか。）
- ・ 今回は有意義だった。残念なのは、業者としては生き残りもあると思うが、消費者不信の“犯人の一人”は食品業界であったことを自覚していないようだ。
- ・ コミュニケーションといいながら、主催者側からの一方通行が多いと思う。例えば、参加予定の人から事前に意見を出してもらい、その内容に沿って会を進めるようにしてはどうか。会を始める前、2ヶ月前位から、案内を出すなどして、本来のコミュニケーションが取れるようにしてはどうか。
- ・ 今回の会は意見交換会にはなっていません。一方的な話ばかりでした。しかも論点がぼやけていて、意味不明の説明が多かったです。
- ・ 食品と言っても、BSEから添加物、農薬etc. と関心の度合いで人の熱さがちがいきすぎる。多くはマスコミがとりあげたものを消費者個人は熱くなり、その後、行政がリスク評価を行ったとしても、行政の発信の手法ゆえか、消費者がひえているせいか、マスコミがとりあげないからか...、評価の結果は届かないし、良くされていない。もったいない！！マス媒体の活用法をもう少し工夫しては？NHKの夕方や昼にコーナーを常設して伝えつづける努力をしてほしい。

問8 今後、食品安全委員会におけるリスクコミュニケーションとして行ってほしい取り組みは何だと思われますか。当てはまるものを全てお答えください。

1) 有識者による講演会（質疑応答含む）の開催	39	16.9%
2) 基調講演やパネルディスカッションを盛り込んだ意見交換会の積極的な開催	61	26.4%
3) 食品の安全に関する平易で基礎的な勉強会の開催	45	19.5%
4) 参加者全てが発言できるような、少人数の座談会の開催	18	7.8%
5) 消費者、生産者、事業者が意見をいつでも言える窓口の設置	38	16.5%
6) 地方における意見交換会の開催	17	7.4%
7) その他	13	5.6%

- ・ 潜在リスクの発掘（国内・国際）や考え方をテーマとしたような討論会。
- ・ 各新聞一面を設ける、消費者に親しみやすい人物の説明を実施する。

- ・広報活動(one wayのcommunicationして満足していないか)
- ・意見に対する回答を必ず返すことが重要。
- ・マスコミを交えて正しい情報を伝達する機会。
- ・いたずらに不安をあおって稼ぐ悪徳マスメディア対策。
- ・地方の生産者、製造業者の安全意識の向上。
- ・マス媒体(できれば全国紙、全国放送)での情報発信。

問9 今後の講演会や意見交換会で取り上げてほしいテーマは何ですか。当てはまるテーマを3つまで下記から番号でお答えください。

《テーマ》

1) 残留農薬に関するテーマ	36	11.8%
2) 食品添加物に関するテーマ	29	9.5%
3) 遺伝子組み換えに関するテーマ	30	9.9%
4) 食品中に混入する汚染物質に関するテーマ	22	7.2%
5) 動物用抗菌性物質(いわゆる抗生物質)に関するテーマ	27	8.9%
6) 有害微生物に関するテーマ	21	6.9%
7) 輸入食品に関するテーマ	48	15.8%
8) 食品表示に関するテーマ	57	18.8%
9) リスクコミュニケーションに関するテーマ	34	11.2%

問10 以下の食品安全委員会の取組みのうち、ご存知のものあるいは利用したことのあるものを全て選んで下さい。

1) 委員会や専門調査会の傍聴が可能なこと(原則公開とされていること)	75	16.8%
2) 委員会や意見交換会等の配布資料及び議事録の公表(食品安全委員会ホームページ上)	74	16.6%
3) 食品安全委員会ホームページ	98	22.0%
4) 食の安全ダイヤル	39	8.7%
5) 食品安全モニター	47	10.5%
6) 食品安全委員会の行うリスク評価案件に関する意見募集及び寄せられた意見に対する考え方のホームページ上での掲載	44	9.9%
7) 食品の安全性に関する政府広報(鳥インフルエンザ等)	66	14.8%
8) その他	3	0.7%

- ・専門調査会の傍聴
- ・食品安全委員会のパンフレット。

問11 過去1年間の食品安全委員会、厚生労働省、農林水産省の取組みのうち一番良かったと思うものは何ですか、又、良くなかったと思うものは何ですか。もしあれば具体的にお書き下さい。

<良かった点>

- ・ 解り易く説明された事（今回）。
- ・ 残農等におけるポジティブリスト制導入。
- ・ アマメシバの対応。
- ・ いろいろな情報が短い間にまとめられ、発信されるようになった。
- ・ ホームページなどにより、情報公開がよくされるようになった。
- ・ ホームページでのQ & Aの徹底。
- ・ 食品表示共同会議を設け、制度間で異なる表示義務について、考え方の統一をし、具体的方法をQ & Aとして示したこと。
- ・ 欧州食品安全庁のあり方と日本の体制が比較でき参考になった。日本の食品安全委員会も努力しているが、なかなか国民には伝わらない点もある。
- ・ 各省の連携は県段階にも反映されてきたこと。パブリックコメント等のシステムが確立してきたこと。
- ・ トレーサビリティシステムの確立。電子メールの情報提供。
- ・ 政府全体として取り組んだ鳥インフルエンザ発生時への対応とその後フォロー。
- ・ こういう地道な取り組みでしか変わらないものもあると思われます。これからはしっかりお願いしたい。
- ・ 鳥インフルエンザの鳥の処理。
- ・ 食への関心が安全へ向いてきた（ような気もする）。
- ・ 情報公開が増えたこと。特に農水（消費安全局）が積極的と感じている。
- ・ 特になし。
- ・ 食の安全を議論する場が増えた。
- ・ 米国へのBSEへの徹底した全頭検査の要求。
- ・ 鳥インフルエンザ発生時の不活性化ワクチン不使用の措置。
- ・ BSE、鳥インフルエンザ等、国内で始めてのものに対する不安を活性化された点は良かった。（特に国として「国民の皆様へ」との広報が新聞掲載された点。）一般消費者は常時インターネットで貴会のホームページを読んで居られる状況の人は大変少数で、一般報道（テレビ、新聞等）で不安が増したりすることが多い。
- ・ 鳥インフルエンザの対応。
- ・ 理解出来た。
- ・ 食に関する事件が起きた際、...鳥インフルエンザ、豚コレラ、ジオキサン...科学的に害がないことを強く公表するようになったこと。いかんせん国民一般は理解できない人が多い。
- ・ 鳥インフルエンザの対応。米国BSEの対応。行政の食品安全への一本化。

<悪かった点・改善した方がよいと思う点>

- ・ EUのシステムはやはりはっきりしなかった。
- ・ 残農等におけるポジティブリスト制や、アレルギー表示における法のみでの先行。現状を把握できていない（方法がない）上での基準値設定。

- ・鳥インフルエンザ、コイヘルペスの対応。
- ・食品メーカー事業者の立場からすると、これまでは問題にならなかった表示問題、あるいは摘発淘汰など（米 DNA、乾椎茸 e t c .）、消費者重視のとりくみは理解できませんが、重箱の隅をつつくような感じがします。
- ・ただし、本当に興味を持って情報収集に努めているものでないと、その情報を得ることができないこと。
- ・食品安全委員会が単なる追認機関になっていること。
- ・マスコミを通して、国民すべてに伝わるようにすべきではないでしょうか。消費者はマスコミの報道の伝え方によって大きく反応が違って来る。例えば、2001年9月のBSEの報道は特にひどかった。今年のトリインフルエンザも同じ。
- ・マスコミの利用が不十分。「リスクがゼロでない」という考え方の定着が足りない。取り組みの主張も大切だが、何かあった際の体制が具体的でない。残留農薬分析 その後の公表体制など。
- ・牛肉のカクリのゴマカシに対してチェックが甘い。
- ・消費者のボトムアップへの努力不足。食品安全委員会以外の傍聴の希望者が多く、傍聴の希望にそえない場合が多い。広い傍聴席を。
- ・米国BSEについて食品安全委員会、厚生労働省、農水省の連携、それぞれの役割がはっきりしないまま現在に至っており、何が問題で、どうしたらよいか不透明と思われる。
- ・事前登録した人以外の参加者が多いように感じられた。会場が少しきゅうくつだったため。
- ・特にない。
- ・消費者（団体関係者ではなく）をあまりすぎて神経質にさせすぎないように。この組織の存在の理由を正しく理解されず、どうも不安を増大させているような気もする。（組織があるということは、不安もあるのではという連想。）
- ・マスメディアの独善的な報道に頼らず、行政から正確に確実に情報が伝わる工夫。食安委ホームページが見にくくなった。字を大きくし、見やすくすることを強く要望。食品安全委員会が設置されてから、行政責任が不明確になった。
- ・食品安全委員会はもっと前面に出たほうがいい。農水や厚労省の陰になりがち。一般の人はほとんど知らないと思うので、報道発表などでもっと発言すべき。農水や厚労の顔をうかがわないでリスク評価を。
- ・マスコミを通しての情報の伝え方。
- ・マスコミに対する教育がなっていない。
- ・鳥インフルエンザ不活性化ワクチンの使用に関する意見募集案文の2つの前提条件の発表の仕方。
- ・上に関連して、平易な言葉でもっと一般消費者に何が危険で現状はどうなのか、国として今後このような取り組みをする予定である等々、行政とタイアップして広報をきめ細かくしてほしかった。今後は期待をしています。各新聞社は貴会の週間、或いは月間の情報を、一般消費者向けに報道してほしい。何かあった時だけでなく。

- ・農薬残留基準の全ての作物毎に（マイナーに）設定（暫定）してほしい。公定検査法を早く！
- ・あいかわらずの役人天下。まず自分たちのこと、次、「消費者が...」と言って自分の保身。
- ・行政（農水・厚労 e t c .）に対し、もっと強力なイニシアティブがとれないものか！
- ・リスクコミュニケーションを食品安全委に行政は丸投げしている。
- ・信用回復のためにやっているはずの「安全」の取り組みなのに、的確な説明がされな
いままの、何を伝えたいのかわからない一方的な発信が多いため、「飽和状態」にな
っている。
- ・“絶対安全”は何であれ無い、としっかり消費者に伝えるべき。リスクゼロがないよ
うに理解しているのは、何かあった時のお国の「安全宣言」という表現にも問題があ
るのでは。

食品に関するリスクコミュニケーション（東京）概要

～薬剤耐性菌の食品健康影響評価指針案に関する意見交換会～

1. 日 時：平成16年8月2日（月）13：30～16：30
2. 場 所：都市センターホテル コスモスホール（東京都千代田区平河町2-4-1）
3. 主 催：内閣府食品安全委員会
4. 参加者：127名（消費者、食品関連事業者、自治体関係者、報道等）
5. 議 事

開会挨拶 寺田雅昭 食品安全委員会委員長
耐性菌問題、評価指針案等についての説明（40分）

「『耐性菌問題』の背景について」 唐木英明 肥料・飼料等専門調査会座長
抗生物質と耐性菌の関係等耐性菌問題全体の概要を説明。

「家畜への抗菌性物質の使用により選択される薬剤耐性菌の食品健康影響に
関する評価指針案について」 井上松久 動物用医薬品専門調査会座長代理
評価指針案策定の経緯、概要を説明。

意見陳述及び質疑応答（90分）

<意見陳述人>（五十音順、敬称略）

井坂 正勝 全国農業協同組合連合会飼料畜産中央研究所所長
稲吉 克仁 養豚経営獣医師
鬼武 一夫 日本生活協同組合連合会
小若 順一 NPO法人食品と暮らしの安全基金事務局長
西沢 耕治 明治製菓株式会社動薬飼料部開発グループ長
八竹 昭夫 全国獣医事協議会副会長
山浦 康明 日本消費者連盟副代表運営委員
萬家 照博 社団法人日本科学飼料協会第二部会副部会長

各7分間の意見陳述に続き、「薬剤耐性菌に関するワーキンググループ」委員との間
で、各3分間程度の質疑応答が行われた。

会場参加者との意見交換（15分）

会場参加者2名から、質問（腸炎ビブリオ、リステリア菌は対象菌種からはずすべき
ではないか、健常者における耐性菌保持の状況はどうなっているのか）が出され
た。

総括（意見の整理） 唐木英明 肥料・飼料等専門調査会座長

- ・耐性菌の評価を始めることについて、理解が図られたと思う。また、本指針案に
ついて、総体としては、賛意を得られたことは心強い。
- ・指針案に関して、主な意見として、リスク評価の手法（定性的評価だけでなく、積
極的に定量的評価を行うべきである）、評価の対象（水や土壌等の環境要因など広く
検討すべきである、抗菌性物質を使用しない場合のリスク評価をすべきである）、ハ
ザードの特定の際の対象菌種（不要のものがあるのではないか）などが挙げられた。
その他に農林水産省・厚生労働省等との横断的な対応、透明性、公平性を保った評
価に努めるなどの意見もあった。ご意見・ご指摘を真摯に受けとめ、今後の指針の
取りまとめの参考としたい。

閉会挨拶 小泉直子 食品安全委員会委員

「食品に関するリスクコミュニケーション（東京）」
 ～ 薬剤耐性菌の食品健康影響評価指針案に関する意見交換会 ～
 アンケートの集計結果

開催日：2004年8月2日（月）

参加者数：127名 回答数：81名（回答率 63.8%）

問1 ご自身について、ご回答ください。

1) 消費者	9	11.1%
2) 農林水産業	4	4.9%
3) 食品関連事業者	19	23.5%
4) 食品関連団体	13	16.0%
5) 研究機関	2	2.5%
6) 行政関係	12	14.8%
7) マスコミ関係	3	3.7%
8) その他	19	23.5%
・畜産関係団体（2）		
・ペットフードメーカー（1）		
・動物用医薬品関係企業（2）		
・大学教員（1）		
・製薬会社（5）		
・厚労関係団体（1）		
・無回答（2）		
・飼料・飼料添加物メーカー（1）		
・商社・食品パッケージ部門（1）		
・食品安全モニター（1）		
・業界団体（1）		
・元・研究開発関係者、現・技術士（コンサルタント）（1）		

問2 本日の意見交換会は、何からお知りになりましたか。

1) 食品安全委員会のホームページ	32	39.5%
2) 食品安全委員会からのご案内資料	21	25.9%
3) 関係団体からのご案内資料	23	28.3%
4) 知人からの紹介	5	6.1%
5) ポスター・チラシ	0	0.0%
6) その他	3	3.7%
・農林水産省メールマガジン（2）		
・無回答（1）		
3名複数回答		

問3 現在、食品安全委員会では「家畜への抗菌性物質の使用により選択される薬剤耐性菌の食品健康影響評価に関する評価指針（案）」についての意見募集を行っていますが、この時期に意見交換会を開催することについてどのようにお考えですか。

1) 今回のように意見募集期間中に行うことが望ましい	73	90.1%
2) 意見募集終了後に行うことが望ましい	1	1.2%
3) 意見募集開始前に行うことが望ましい	7	8.6%

問4 今回意見交換会全体を開催したことを、どのようにお考えですか。

1) 評価する	64	79.0%
2) やや評価する	15	18.5%
3) あまり評価しない	0	0.0%
4) 評価しない	0	0.0%
5) 無回答	2	2.5%

評価理由

- ・ 意見募集の〆切を考えるともう少し早い時期にやるべきだった（7月半ばくらいに）。（2）
- ・ 専門的な分野であり、多角的かつ分かり易い説明の機会は重要。（1）
- ・ 大変広範囲な問題なので一時期に決定作成される質のものではない。従って徐々に付加訂正をしながら、出来るだけ実情に添ったものにして頂きたい。（1）
- ・ マスコミを通して国民（消費者）に情報が伝わること。（1）
- ・ わかりにくかったものが、理解されやすい。（1）
- ・ 評価指針案作成プロセスにおいて、その経過を訊く関係各位が見届けられるから。（1）
- ・ 専門調査会が中立の立場で検討されていることに敬意を表します。（1）
- ・ もう少し早い時期に開催していただき良かった。（2）
- ・ 開催することが重要と思う。（1）
- ・ 委員会の前向きな姿勢。（1）
- ・ 幅広い意見を傍聴人の前で交換する場は必要だと思った。（2）
- ・ 陳述人が各々に時間を取って述べるのを直に聞くことはとてもわかりやすかった。その所属団体への評価もしやすい。（1）
- ・ やはり、なぜこのような取組みをしているのか、また評価を行う方々の中立的立場を理解してもらうためにも、必要な情報交換の場であると思います。いろんな意見、考え方の中で、十分な意見交換を行うのは難しいですが、必要な1つのステップとして今後もやって欲しいと思います。（1）
- ・ ただし、意見受付終了間近に行なうのはどうでしょうか？（1）
- ・ 問題点が明確化される。（2）
- ・ 委員会の考え方が偏っていると感じた。（1）
- ・ 意見募集中に開催し、多様な意見陳述をきいたことが評価に値する。是非、指針案にどのように反映したか、もしくはしなかったか、食品安全委HPで公表してほしい。（1）
- ・ 食品安全委員会の活動が少し理解出来た。（1）
- ・ 抗生物質等の使用が適正に評価される方向になるものと考えます。（1）
- ・ 様々な方面からの意見を聞くことができ非常に良かったと思われる。（1）
- ・ 場所の手配等の都合もあると思いますが問3との関連で、意見募集開始の初期の方がベターと思います。（1）
- ・ 意見提出の役に立つが、受け付け期間の8月4日までが短かすぎる。（1）
- ・ 委員会からの最初の説明が長すぎる（一般的なものはいらない）。その時間を意見陳述にあてた方がよい。（2）
- ・ 各業界の考え方がわかることは重要。（1）

- ・ 意見を応募する上でも、交換会が参考になる為。(2)
- ・ 様々な立場の人が同席で異なる意見を出し検討出来る。(1)
- ・ パブリックコメント募集中に意見交換会を実施した点評価。畜産ばかりでなく魚介類養殖事業の意見発表者も入れるべきであった。(1)
- ・ 行政(委員会)、業界、消費者の様々な立場の意見を肉声で聞くことができ、現状について自分なりに整理できた。(1)
- ・ 指針(案)について、様々な分野からの様々な意見を公募により得るということは、リスクコミュニケーションとして非常に高く評価できると思います。(1)

問5 意見交換会に出席されてどのような感想を持たれましたか。あてはまるものはすべてご回答ください。

1) 広く関係者の意見を聴き、意見交換する行政の姿勢がみられた	48	59.2%
2) 情報を公開していこうとする行政の姿勢がみられた	37	45.7%
3) 対行政だけでなく、立場の異なる関係者間での意見交換が大切と感じた	50	61.7%
4) 意見交換としては、不十分だった(時間的・内容的)	16	19.8%
時間的(4) 内容的(2)		
5) 行政の一方的な説明に終わって、運営に不満を感じた	1	1.2%
6) 薬剤耐性菌について理解が深まった	21	25.9%
7) その他	3	3.7%
・ 背景の異なる、理解度の異なる人々の中での意見交換会は難しいため、時間的制約を感じたが、今回はこの程度が適当と感じた。		
・ 国民に正確な知識、情報が伝達される原点となる会にして欲しい。		
・ 先日の新聞報道にあるように消費者(しかも一般市民)の参加はどうだったのか不明だが、白紙の人々の意見の汲み上げ方工夫すべき(難しいとは思いますが)。		

問6 今回の意見交換会の進め方についてお伺いします。

1) 満足	23	28.4%
2) やや満足	46	56.8%
3) やや不満	9	11.1%
4) 不満	0	0.0%
5) 無回答	3	3.7%

また、会の運営等で何かお気づきの点がございましたらご記入ください。

- ・ 前半の説明部分の時間がやや長い。今後は会場との意見交換がしやすい小規模な会議もやってみてほしい。
- ・ 殆ど定性的な議論に終始した感がある。
- ・ 耐性菌問題及び評価指針案等についての説明の時間が45分でなく、もう少し欲し

かった。

- ・ 意見陳述の時間が各7分では短か過ぎる。1問1答に終わっていて発展性が感じられない。反対意見については“ 弁解 ”の域を脱していない委員からの“ 回答 ”が多かった。徹底的に議論し、それを公開すべき。更に、今回の意見一点一点について新たにどのような点が変わったか（改良されたか、もしくはどのような議論の末、反映されなかったか）などを公表すべき。そうでないと反対意見を聞きました、というアリバイ的パフォーマンスとしか受け止められない。
- ・ 会の運営上、安全委員会のメンバーのみ役職をつけて呼び（座長、委員）あとは全て「 さん」にしたらどうでしょうか？これだけ「先生」が多いと非常に違和感を覚えます。「公開」という言葉を活かす上でも、「内輪」な感じを減らす努力が必要と思います。
- ・ 意見交換会参加募集から開催までの期間が短いように感じた。また、度々こういう会を開いて欲しい。
- ・ もう少し焦点を絞った論議をなされた方がよいかと。各意見陳述者の裏付データ、根拠をお示しいただきたかった。
- ・ 指針案の文章をポイントで良いから説明を頂きたかった。
- ・ 準備してきた意見を述べるのではなく、もう少しその場での意見交換があればよかった。
- ・ 公正にやっていただけるということで良いと思います。
- ・ もう少し意見交換の時間、discussionの時間がとれたら良かった。陳述人同志の意見交換があっても良いと思われれます。
- ・ 個別問題の第1回目で、“ 市民運動家 ”の評価は別として、白紙の消費者への働きかけが大切。
- ・ 消費者団体、生協関係者の意見陳述人の選択に偏りがある。同一の意見を持った関係者かと思われた。
- ・ 1) 関係者席の関係者は行政の方ですか。だったら、作業員は別として、前方ではなく、後方にすべきではないですか。2) 意見陳述人だけでなく、公募した人全員の意見を知りたいと思います。
- ・ 問4に同じ。(委員会からの最初の説明が長すぎる(一般的なものはいらない)。その時間を意見陳述にあてた方が良い。)
- ・ もっと時間が必要では。ゼロリスクを求める消費者と業界との相互理解を得るには具体的な話をすべき。
- ・ 2~3の意見陳述人の方は、消費者の不安や意見を本当に代弁し、反映しているのでしょうか。そのことに不安を感じました。
- ・ 消費者の出席が少なすぎるのではないか。「消費者」と「消費者団体」は別の意見を持っているはず。
- ・ 本当の意見はブレーン・ストーミング的なやり方の方がよく出るのではないか。
- ・ 一行政担当者として、今回の交換会は非常に勉強になりました。ありがとうございました。

問7 以下の食品安全委員会の取組みのうち、ご存知のものあるいは利用したことのあるものを全て選んでください。

- 1) 委員会、専門調査会の傍聴が可能なこと（原則公開されていること）

	64	79.0%
2) 食品安全委員会ホームページ(委員会や意見交換会等の配布資料及び議事録、意見募集、リスク評価等)		
	66	81.5%
3) 食の安全ダイヤル	24	29.6%
4) 食品安全モニター	27	33.3%
5) 食品の安全性に関する政府広報	32	39.5%
6) その他	0	0.0%

附問7 - 1 上記で選択したものについて、御意見やご感想がございましたらご記入ください。

- ・ データで立証されない部分にどうしても不安を感じてしまいます。今後も調査をお願いします。
- ・ 輸入食品についても取り組んでほしい。
- ・ 当日、現地にて20名というやり方では行けないことが多く、今日はとても来やすかったことが良かったです。
- ・ データ評価は立場が影響するが(純粋な科学)データは立場の差はでないというお話があったが本当にそうだろうか。科学者も生活者であり、社会情勢に全く影響を受けないということは考えられない。ムリに中立と言うと逆に疑念がわく。HPで行っているように経緯を公開しているということでのよいのではないか。科学的判断(=真実、中立)に限界がでてきているのがトランスサイエンスの現状。そもそも科学的データが中立、真実なら、様々な立場の人々をまとめていく「政治力」を必要とするリスクコミュニケーションを食品安全委が行うのは自家懂着ではないのか。科学的事実と様々な立場をかんがみた上での最善は必ずしも一致しないのではないか。
- ・ 別かもしれませんが、リスクとベネフィットを考えないといけないと思いました。「これは別でやりますから」が、結局考えずに結果が出てきてしまう恐れがある気がします。
- ・ 今後、食品安全委員会が実地に試験を実施し、リスク評価を行っていく様にすべきである(例えば、米国FDAの様に)。
- ・ ホームページで今後公開される委員会、リスコミを分野にかかわらず一覧できるようにして下さい。
- ・ 委員会HPについて、もし委員会スケジュールがもう少し早くわかるようであれば、早めに載せて欲しい。
- ・ 委員会等終了後、早い時期に議事録の掲載をお願いしたい。
- ・ ホームページには委員会の開催等の情報が中心で不十分。過去の資料等(議事録、会議資料以外の)についても可能な限りホームページ上で公開してほしい。
- ・ ホームページのデータ更新が遅い(タイトルと中身が違っていることがある)。

食品に関するリスクコミュニケーション(東京)概要 (未定稿)

～日本における牛海綿状脳症(BSE)対策の検証に関する意見交換会～

1. 日時:平成16年8月4日(水)13:30~17:00
2. 場所:草月会館「草月ホール」(東京都港区赤坂7-2-21)
3. 主催:内閣府食品安全委員会
4. 参加者:約220名(消費者、食品関連事業者、行政関係者等(報道関係者約50名))
5. 議事

日本におけるBSE問題についての説明 (約45分)

「プリオン専門調査会における調査審議の経緯」

吉川 泰弘 プリオン専門調査会座長

これまでのプリオン専門調査会で話し合われた内容について説明

「『日本における牛海綿状脳症(BSE)対策について(今までの議論を踏まえたたたき台)』について」

金子 清俊 プリオン専門調査会座長代理

「日本における牛海綿状脳症(BSE)対策について(今までの議論を踏まえたたたき台)」(以下「たたき台」という。)の策定の経緯と概要を説明

意見陳述及び質疑応答 (約90分)

<意見陳述人>(氏名50音順、敬称略)

岡田 浩一	エックス都市研究所第二研究本部
笹山 登生	日本エコ・ツーリズム協会理事
高橋 まみ	主婦
高谷 順子	主婦
多賀谷 保治	(株)吉野家ディー・アンド・シー商品統括室長
戸谷 真理子	主婦
原 英二	日本生活協同組合連合会安全政策推進室
牧島 一博	肉牛生産者
三宅 征子	食の安全・監視市民委員会

各7分間の意見陳述に続き、プリオン専門調査会委員との間で、各3分間程度の質疑応答が行われた。

会場参加者との意見交換 (約10分)

会場参加者2名から、質問(地方でも意見交換会を開催してほしい、「たたき台」の検出限界以前の検査に関する結論が強引ではないか)が出された。

総括(意見の整理) 吉川 泰弘 プリオン専門調査会座長

- ・食品安全委員会が我が国における牛海綿状脳症(BSE)対策について科学的な検証を行うことの意義や必要性については理解が概ね得られた。
- ・「たたき台」の中でも、検査に関する意見が多く出された。これらの中で、検査の限界はあるにせよ、安心の観点から全頭検査を継続すべきとの意見や、スクリーニングの効率性の観点から検査はサーベイランスに限るべきとの意見などがあった。今後とも、科学的観点から検討を続けていく必要があるものと認識された。
- ・科学的検証についてのコミュニケーションについての意見、要望があり、リスクコミュニケーションを充実させることの必要性について参加者の意見が概ね一致した。
- ・人から人への感染リスクや、BSEの発生原因などについても評価すべきとの意見があったが、これら横断的な検討は、どこかで必ず実施していく必要があるとする考え方については、参加者の間で異論はなかった。
- ・食品安全委員会における現在の作業は、輸入再開とは関係なく、約3年間に及ぶBSE国内対策に限定して検証している旨の説明を行った。
- ・「たたき台」については、プリオン専門調査会においても議論中のものであり、本日の意見交換等を踏まえ、今後とも、プリオン専門調査会での議論を深めていくこととしたい。また、議論を進めるに当たっては、透明性を高くして、関係者と意見を交換してまいりたい。

「食品に関するリスクコミュニケーション（東京）」
 ～日本における牛海綿状脳症（BSE）対策の検証に関する意見交換会～
 アンケートの集計結果

開催日：2004年8月4日（水）

参加者数：221名 回答数：97名（回答率43.9%）

問1 ご自身について、ご回答ください。

1) 消費者	20	20.6%
2) 農林水産業	3	3.1%
3) 食品関連事業者	32	33.0%
4) 食品関連団体	7	7.2%
5) 研究機関	0	0.0%
6) 行政関係	21	21.7%
7) マスコミ関係	1	1.0%
8) その他	11	11.3%
・ 食肉流通業（1）		・ 技術士（1）
・ 外国公館（2）		・ 脂肪酸製造メーカー（1）
・ コンピュータソフト企業（1）		・ 米国食肉輸入連合会（1）
・ 制作会社（1）		・ 製薬会社（1）
・ 業界団体（1）		・ 無回答（1）
9) 無回答	2	2.1%

問2 本日の意見交換会は、何からお知りになりましたか。

1) 食品安全委員会のホームページ	46	47.4%
2) 食品安全委員会からのご案内資料	22	22.7%
3) 関係団体からのご案内資料	15	15.5%
4) 知人からの紹介	5	5.2%
5) その他	9	9.3%
・ 農林水産省メールマガジン（2）		
・ 業界誌（4）		
・ 食の安全・安心トピックス（1）		
・ 新聞記事（1）		
・ 無回答（1）		

問3 今回の意見交換会全般について、どのようにお考えですか。

1) 評価する	37	38.1%
2) やや評価する	45	46.4%
3) あまり評価しない	14	14.4%
4) 評価しない	0	0.0%
5) 無回答	1	1.0%

評価理由

1) 評価する

- ・ B S E に対して前より考え方が変わりました。今現代のリスクは、私自身も考えるに、難しい問題だと思いました。今後、コミュニケーションを多くふやして欲しいと思いました。
- ・ 専門委員の活動を評価する。
- ・ 不明確な点を不明確として示した点を評価する。
- ・ それぞれの立場での意見交換ができた事。この事を、以降どう生かされていくのが一番大切。
- ・ いろんな考え方の人達から意見を聞くことで、方向性を見つけられる。
- ・ 内容が具体的でわかりやすい情報の提供の場と思うため。
- ・ 多くの専門家の出席に感謝をしたいと思います。行政主導でないのがよかったです。業界の方が多いはちょっとどうかと思います。別の場での消費者の啓発も必要か。
- ・ 一般に公開しての話は非常に役立つ。
- ・ 生産者のご意見、生協の方のご意見、金子先生のご意見等、おもしろい意見を聞けた。また勉強していきたい。
- ・ 専門家（座長、金子氏）からのわかりやすい説明。
- ・ 意見陳述の内容が、消費者等の意向として理解することができて、大変参考になりました。
- ・ 議論の透明性、何が問題かを率直に明らかにし、皆で考えようとする姿勢を評価したい。国民のガス抜き、形だけ国民の意見を十分聞いたとするような、政治的に利用することのないよう、行政に望みたい。
- ・ たたき台を踏み込めていない部分や、陳述者側の思考などよくわかりました。意見陳述については、議論（委員会内での）で、議論しつくしたような気がします。委員会や各省庁などが、どの分野をになっっていて、どう結果を連携していくのか、その線がもっとわかりやすくみえるようになるとういことだと思います。スーパーに足をはこぶ主婦が、かじった情報に流されない、わかりやすく浸透していく情報を考える必要があると思いました。（一番現実的なのは、主婦高橋まみさんの意見だったと思います）。
- ・ 金子先生の説明が非常にわかり易かった。リスコミに必要な視点である。多様な意見が聞けて良い。
- ・ 7名という狭い意見人範囲の中で、それぞれの立場の方を選ばれたと思います。最後に座長の総括があったのはとてもよかったです。
- ・ 一步一步前進することが大事。科学的データの論議を封ずるような“消費者連盟”の発言内容不満。
- ・ 様々な立場の意見を述べさせた点。
- ・ 専門委員会として意見を直接聞くことが出来た。消費者の考え方がいろいろあったこと。
- ・ リスクについて不確実性について説明され、少しずつ浸透してきているように感じられる。主催者側はリスクコミュニケーションになれてきたように見える。科学的評価を自信をもって今後も公表すべき。そのうち消費者も慣れるでしょう。

- ・ 様々な立場の人の意見が発言されたため。
- ・ たいへんすばらしい。委員会の皆様の回答も、意見者の言葉を尊重し、謙虚な態度で良い。今後の評価に期待したい。なお、リスク管理が心配だ。
- ・ 様々な分野の意見が聞けたから。
- ・ 色々考慮された末のことであろうとお察ししますが「消費者の団体」とする一部の議論の為の団体は、別途機会をもうけられた方が良いかと思います。発想の起点が全く違うと思います。
- ・ これまでになく、一般市民の意見も聴取できたような印象を持ちました。しかし、もっともっとコミュニケーションが必要と考えます。
- ・ 意見交換に主婦の声が反映され、取り上げられた点。

2) やや評価する

- ・ 意見交換会を実施することは評価するが、たたき台とするまでデータがそろっていない。不確実性が高い内容であると思うので、時機は総早尚だと思う。
- ・ 意見陳述人には評価と管理を混同している方が見うけられた。安全委員会の方でうまくリードした方がよい。
- ・ 7 / 16 第 12 回プリオン専門調査会で議論された「たたき台」の内容確認であったが、新しい情報の提供がなかったのは残念。米国産牛肉の輸入再開に向けた協議が進んでいるが、何をもって合意とするのか、難しいのは分かるが、プリオン専門委員会が科学的根拠をもって明示しなければ時間の浪費となる。早い時期の結論を期待したい。政治的判断はない。
- ・ リスク評価という立場と、リスク管理の違いはわかった。一方、そうした機械的任務分担だと、食の安全を守るにふさわしい対処ができるか、きわめて疑問だ。
- ・ 関係者が多く参加しているので、リスク管理の立場の方にも意見を求めても良かったのではないのでしょうか（現場の状況を説明してもらうべきではないでしょうか）？
- ・ 説明が難しくよく判らない（スッキリしない）（金子先生）。
- ・ 不確実性という点にて、責任のがれが多いのでは？
- ・ 吉川座長のまとめが、フレキシビリティであり、意見陳述の内容を収束させてくれた。
- ・ リスク評価とリスクマネジメントの問題の切り分け。米国産牛のリスク評価の難しさなどの論点が明確になった。
- ・ 意見陳述の内容が同じことが多いと思う。
- ・ うしなのかぎゅうなのか？他の専門用語の説明等もしてほしい。
- ・ 様々な立場から多くの意見を聴く場を設けることは非常に重要と考えます。消費者、食品業界からの意見は大変貴重と思います。ただ、生産現場や、実際に検査を行っている現場からの視点での意見がもっと多く出れば良かったと思います。リスク評価を行う側と、それを受けて動く現場と、大きな隔たりがあると思います。
- ・ リスク管理とリスク評価はどう考えても「食の安全」をまもる上できりはなせるものではない。SRM除去がちゃんとできていない時点で全頭検査をやめたら「安全」がさらにおびやかされて、お肉を食べる人が減ると思う。リスク管理ぬきで食の安全は語れない。

- ・ 消費者 = 消費団体ではない！！消費者団体の意見を国は意識しすぎ。国民全体を考えるべき。これらの方は、基本的に輸入物にすべて反対する人たち。世界の食をもっと考えるべき。高橋まみさんのような意見をもっと重視すべきで、今後食料不足の危機もある中では、世界との調和を重視して食の文化を守って欲しい。食べたくない人は食べなくて良い。食べたい人が食べれば良い。なぜリスクがこんなに低い B S E をここまでお金を使い議論するのか、政府は国民に一任すべき。
- ・ 幅広く意見を求め、対立した意見の人を選んでいる点がよかった。
- ・ 主婦の参加が多過ぎる。漠然とした不安を述べられるので。過大な報道をしがちなマスコミも参加させた方が良い。対立する意見を持っている者同士の論議をさせた方が良いと思う。
- ・ リスク管理者も含めて議論できれば良かった。
- ・ 意見陳述人が各人の意見を述べただけのような気がする。日本の B S E 対策や専門家の「リスク評価」の全体像自体を素人が肯定・否定するよりは、評価たたき台中の各要素についてコミュニケーションを図ればもっとよかったのではないかと思います。
- ・ 一般の主婦でも意見を聞くことが出来るのはよい。色々な意見等が聞けて面白かった。
- ・ 事務局の進め方が不十分。事務局は、あまりにも「リスク評価」にこだわっている姿勢がうかがわれる発言が多く、不快。もっとふみこんだ姿勢が必要（食安委はなんのために設立されたか良く考えろ！）
- ・ 意見陳述人がメディアの情報のうち、自分達の都合の良いものだけを信じており、公平な判断が出来ていない。政府からの情報発信不足なのは。何故、専門家の意見に耳を貸さないのか疑問。
- ・ 食品安全委員の方の生の声が聴けたことは評価します。ただし、意見交換の焦点が定まっておらず、委員会の権限外の質問、意見が多かったのはマイナス。
- ・ 基本的に本日の意見交換会について、意義のある会であると考えます。“たたき台”について、率直な結果の公表という点において、一定の評価をされるべきものであると考えます。実際、情報不足による消費者の誤認識を今後解消するためにも、できうる限り各地で開催して頂けたらと考えます。今回招いた陳述人に消費者団体関係者を含めていることが、ある種のクリーンなイメージを持つことができると考えられ、評価できると思います。
- ・ 意見交換が比較的ゆっくりやられた。だが、まだ討論になっていない。
- ・ リスクコミュニケーションに対する積極的な意見交換の場を求める姿勢を感じる。もう少し、委員会の評価範囲を先にもっと明確にしてから進める方がよい。
- ・ 当委員会の範囲を外れている事であるが行政当局（両省）の返答もききたかった。
- ・ アメリカの牛については情報がとぼしく、評価できないという話がきけたこと。
- ・ それぞれの立場の人を自由に意見を言わせることに意義はあったと思えます。しかし、本来食品安全委員会として求めているたたき台についての意見ではないものもあり、その辺りはやむをえないかなと思います。
- ・ B S E のリスクに対する考え方の意見が聞けた。
- ・ 様々な方の意見が聞けたので。でも、難しい用語が多く出てきて、理解できた部分

が少ししかなかったのが残念でした。

- ・ 時間が少ない。
- ・ 食品安全委員会は、評価、管理、コミュニケーションについて独立した立場でかつ、科学的であるという立場をブレずに継続されることが大切であろうと考えます。合わせて、消費者心理への理解と呼応した情報発信を継続される様に期待します。

3) あまり評価しない

- ・ 何度も同じ事をやっても意味がなく、安全委員会を通して結論を出し、その結論に対する意見交換にそろそろすべきと思います。
- ・ この様な場合は、もっと一般消費者、実際に主婦層の方々へ広げていく事が大事。
- ・ 意見が噛み合わない。質問に対する返答が浅かった。
- ・ 時間が足りない。国民はリスクアナリシスよりもマネジメントについてのコミュニケーションを求めているのでは？ マネジメントは大切だがべつといわれてもこまる。なぜなら、科学的にこうですよといわれると、国民は受け入れる（ざるをえない）に決まっている。
- ・ 馬鹿な意見陳述人が多かった。
- ・ プリオン委員会の評価がわかりにくい。マネージを別な人だという言い方が逃げ腰である。
- ・ 陳述者の選択に偏りがある。“消費者”は主婦のみでなく、幅広い層（サラリーマン層・大学生等）を含めるべき。参加者にあまりに偏ったイメージが蔓延しすぎ。
- ・ 安全委員会が出したたたき台は不確実なものは評価できないという事で、客観的なデータがないリスク管理については評価できないということでしたが、たたき台のメインになっている純科学的な点については、一般消費者がそもそもコミュニケーションを取れる内容ではない。一般の消費者が意見をぶつけたいのは、全頭検査を見直すなら、その前提となるSMRの除去etcの管理体制はどうなのか？輸入牛を和牛と同じと見て良いのか？などの点ではないでしょうか？
- ・ 今日の意見が反映されるのか疑問だから。
- ・ 陳述人との意見がかみあっていない。内容をもっと平易にしないと、一般の消費者には理解が難しい。
- ・ 意見の内、現状維持的な意見が多く、科学的根拠を見て評価をすべき。
- ・ リスク評価が食品安全委員会の仕事であれば、たたき台作成で終わり！意見交換会は、リスク管理を担う部署が行うべきでは？
- ・ 一方的な意見の発表になっている。
- ・ リスクコミュニケーションを行う時期をあやまった(早すぎた)という印象を持った。意見は、リスクマネジメントや機関以外のリスク評価も含めて総体的なものが多く、それに対する回答が出来ていなかった。安全委員会に加え、厚生労働省、農水省の施策方針が明確になった時点で再度コミュニケーション行う必要があると思います。

問4 意見交換会に出席されてどのような感想を持たれましたか。あてはまるものはすべてご回答ください。

- 1) 広く関係者の意見を聴き、意見交換する行政の姿勢がみられた

	45	46.4%
2) 情報を公開していこうとする行政の姿勢がみられた		
	30	30.9%
3) 対行政だけでなく、立場の異なる関係者間での意見交換が大切と感じた		
	50	51.5%
4) 意見交換としては、不十分だった(時間的・内容的)		
	30	30.9%
時間的(9)、内容的(3)		
5) 行政の一方的な説明に終わって、運営に不満を感じた		
	5	5.2%
6) BSE 対策について理解が深まった		
	22	22.6%
7) その他	19	19.6%
・ マスコミ情報を基に判断されている国民の実態が、改めてよく分かった。よく勉強されている方が多いが誤解が多く残念。		
・ なぜ今なのかという疑問ははれなかった。		
・ 会場が暑すぎる。		
・ 高橋さんのような意見を持っておられる消費者がおられることを知って大変心強い!		
・ 座長お2人のプレゼン内容が多すぎる。もっと絞っていただきたい。		
・ 何がしたいのか不明。		
・ (1)に近いが、“行政”という単語が押しつけがましすぎ。これで評価を与えると、“行政”は天狗になります。(1)を“委員会の委員の方々の努力”に置き換えて下さい。		
・ 座長が終始話されていた、客観的な立場中立的な立場に立ちたいというスタンスこそが必要であり、委員会の存在意義が無いという意見は非常に乱暴であると思います。消費者や、その団体の考え方にそぐわない意見は否定というのは主観的であり、それに惑わされることなく、その委員会としての意義を全うして頂きたいと思いません。		
・ 専門的な内容が、かなり平易に説明されてよかった。		
・ リスクコミュニケーションへの努力、労力を大いに評価します。今後の引き続きさらなる努力に期待します。		
・ たたき台について、全頭検査の見直しについてふれるのであれば、その前提となるリスク管理が確立している事が前提となるはずだが、そのリスク管理が不確実性を理由に評価できないのであれば、結論として全頭検査は必要となるはずでは?		
・ 行政の意見がなにもない。		
・ 管理は別という話が多くあったが、リスコミに管理側の発言の機会をもうけてはどうか。		
・ 意見陳述人の意見によりプリオン委がもっとリスク管理施策を検討すべきことがよくわかった。		
・ 概ね科学的評価は出来たのではないかと思う。		

- ・ 政策立案のプロセスの明確化に役立つ。
- ・ Management 部門に比べ、食品安全委員会の活動はとても消費者が納得しうるような活動と思っています。費用がかかるかも知れませんが、さらに拡大されて行くよう期待しています。
- ・ 行政の説明不足。
- ・ 限界を感じつつやっている食委、という印象を受けた。
- ・ 消費者の方々、よく勉強されていると思いましたが、安全な牛肉を届けようと日々がんばっている現場（生産農家、と畜場等、家保も）についてもっとよく知ってほしいです。もちろん食品安全委員の方々にも。

問5 BSE 問題について、どのようなことに関心がありますか？

- ・ アメリカ等の非清浄国及びオーストラリア等の清浄国の安全情報とリスク評価結果。科学のみではなく、マネージメント部門と合わせたリスク評価が、正直必要とってしまった。
- ・ B S E 問題は、今現代の社会に対しての大きな問題と思います。日本の食品企業にも大きな打撃もはしり、国民に対しても恐怖な物だと思いました。今後は、どのようにこのリスクを辺変をさせていくのか見物です。
- ・ リスク管理の実態。
- ・ 不確実性が多いこと。政治圧力が多いこと。
- ・ 第三国のステータス評価。たたき台の中で、検出限界以下の若齢牛の検査について評価したのはよいと思うが、何ヶ月齢以下は検査不要なのか明記していないのは不十分。線引きは管理の問題？評価者の仕事ではないか？
- ・ 牛肉(含む内臓)を食することの安全性と、国民に対する科学的根拠をもった行政、専門家からの十分な説明による、国民の理解と納得。
- ・ 日本のスクリーニングとサーベイランスの考え方。豪州、NZ に対する輸入国としての指導。
- ・ 一般の方々がどれだけ正確な知識をもって B S E 問題に接しているかという事。
- ・ v C J D がどの位の確率で発症するかです。数値が科学的かという机上の議論もありますが、多くの消費者は、日常生活の中に於いての判断基準を欲していると考えます。リスクが受容されるかどうかは、例えば交通事故に比べて多いかどうか、がんにかかる確率に比べてどうかと考える方も多いと云えるでしょう。是非はともあれ、この現実に対して数値による何らかのメッセージは必要であると考えます。
- ・ 全頭検査の必要性のロジック。米国牛肉の安全性に対する考え方。
- ・ 米国牛の輸入再開の時期。
- ・ 肥料用骨粉類のリスク評価（輸入品）。
- ・ 米国が示した B S E 対策の実行性に対する疑問。米国の B S E 頭数 米国実態解明に消極的。日本は積極的検査で 1 1 頭発見。
- ・ 全頭検査のあり方。
- ・ 輸入牛肉（由来成分を含む）を日本国内に持ち込む際の B S E リスク（B S E 発生源国及び非発生源国）。
- ・ 全頭検査の可否と米国牛肉の輸入再開。

- ・ 米国の牛肉輸入再開について。きちんと管理されていない牛を輸入するのは危険すぎると思います。
- ・ 全頭検査。消費者の反応。
- ・ 月令、SRM、検査精度の関係。
- ・ 本日意見を述べた方々が、だからどうして欲しいかわからない。情緒の話をする場ではない。難しい問題であるが、サーベイランスの月令をハッキリすべき。
- ・ 疫学的な検査をより一層拡大してほしい。
- ・ 1、此の疾病に関する正確な情報の伝達に、国はもっと積極的にマスコミ特にTVを通じて行うべきだ。2、USA、カナダからの輸入停止により、一般消費者向けの国産牛価格が25%位値上りし、外食産業、食肉店、スーパー等で牛肉の値上り、原料不足により供給がいちじるしく低迷、いわゆる「牛肉バナレ」が起きている。また、肉牛価格の値上りに伴い素牛（仔牛）価格も大巾に上がり（50万円台＝牝牛）今後の肥育者の経営が危ばれている。24ヶ月令以内のBSE検査を中止して、特定危険部位の除去について厳重なチェックの上、外国工場を指定して輸入の再開をすべきである。3、最終的に消費者の選択にゆだねるべきではないか。
- ・ 米国からの牛肉輸入再開。
- ・ 全頭検査の中止。
- ・ 食の安全性について、牛肉を通して理解する事ができた。食全般のリスク評価をし、今後の対策を十分にしてほしい。
- ・ 早期に全頭検査を止め、サーベランスの考え方に変える事。
- ・ 国内でのBSE対策実施状況について（報告が十分でない点について）。
- ・ 日本政府が「何を食肉の安全としているか」。また、その根拠は何か、という点。
- ・ BSEは本当に安全になるのだろうか。ウィルスの問題でよく変異？して変って行くが、本当に安全なのだろうか。
- ・ 科学的な評価と行政との関係。科学的評価が不確実でも、行政は動かねばならないので、その間の解離の存在の関心あり。
- ・ BSE発生後、なにか問題がおこるたびに対応が現在まで進んできたが、その問題への対応がなされる前のリスクはどうなっているのかが非常に不安。たとえば、牛由来の牛脂、ゼラチン等が多くの加工品に使用されていたが、一定の処理がされる前のものが混入した食品を食べてしまったリスクをどう考えるのかが、忘れられていると強く思う。
- ・ 全頭検査について費用対効果に関心があります。現在のようなことをやっている企業ではつぶれています。行政は費用対効果の深考不足です。
- ・ 本当にBSEとvCDJは同じ病気なのか。プリオンを有すればBSEなのか。
- ・ 安全と安心をつなぐものは何か。
- ・ 政府の方向性。
- ・ 非常に関心あり。公になったインターネット上のものは殆ど見ている。
- ・ 日本国内でのリスク評価と海外物のリスク評価は、明確に分けて行うべき。輸入も発生国と未発生国とのダブルスタンダードになるのか。
- ・ 検出限界（全頭検査）。家畜伝染病予防法。レンダリング等、4D動物の処理現状など。

- ・ 検出限界があるのならば、陽性とならない感染牛を食べていることになるのか？それなら国産牛も食べられない。日本の検査はどうして税金を使うのか？業者が払うべきと考える。肉を食べない人にとっては不公平。
- ・ 米国からの輸入が、どのような説明のもとに再スタートされるのか？
- ・ 米国との輸出入同時再開について。BSEスクリーニング検査の有用性について。
- ・ リスク管理をどうするか、ここが解決しないと国民の安心はえられないと考える。
- ・ BSEの国内のリスクはよくわかったが、輸入については管理がみえないし、各国のチェック体制はまた別の省庁で考えていくものでしょう。消費者側が、正しい情報を得て、何を安全として選択すべきかということだと思います。BSEに限らず、輸入品については、各国の安全基準や状況がみえない。それを選択するのも各消費者、ということにおちつくのではないのでしょうか。国内の生産、国内の安全基準、他国の生産、他国の安全基準、正しい情報提供は必要ですが、選ぶのは誰でしょうか。
- ・ 米国産の再開。全頁にも記入したが、意見の収集、公表をもっと幅広くすべき。元来、米国産を食さない方は“消費者”でなく“生活者”。本当の“消費者”の意見をもっと公表すべき。
- ・ 行政への不信から、全頭検査を開始したと認識している。若齢牛への検査等、科学的妥当性に基づき、体制を整備すると共に、その事を行政、マスコミは国民にしっかり説明すべきである。
- ・ 初期対応のまずさから、この様な大問題になるのだなと思った。金額、情報公開、食肉業界の暗部、結果としては良い方向に向っていると思う。しかし、今回の改正は、アメリカもかんでいてむずかしくもあり…。
- ・ ゼロリスクがあり得ないことへの理解不足から、過剰な反応があり、口も振り回されすぎ。逆手にとったサギ行為には厳罰を！！
- ・ 全頭検査は費用がかかり過ぎるうえ、検出限界もあるので、SRM除去一本に絞った方がよい。また、根拠のない恐れ論により、羊の腸まで禁止にするのは行き過ぎ。とくに加工品にまで制限するのは論外（ケーシング）。
- ・ 科学的関心事項を食品安全性・動物衛生上の関心事項とのあるべき評価が混乱しているので、別々に考えるべき。食品安全・動物衛生上の懸念事項を（BSE問題に限らず）リスク軽減量上得られるベネフィットと、それにかかるコスト（税金も含む）をもっと広く公表すべき。
- ・ アメリカの輸入再開。
- ・ BSEにかかる費用対効果。なぜ日本は世界の人間が食べてる基準以上のことをするのか、税金のむだづかい。政治家の圧力で始まった全頭検査を、なぜ国民にはっきりと明示しないのか？だからこの様なむずかしい議論になっている。これも税金のむだ使いでは？もっと他に大事な食のリスクを考えるべき。生産者の方は検査代を払ってないからいろいろいえること、安心と安全を区別すべき！！米国のリスクはハーバード大がすでに出している。意見が2分されるのであれば、国民にすべてのリスクを公表したうえで、わかりやすく牛丼が食べたいかどうか、アンケートでもしたらどうですか？
- ・ 国民の税金を“むだ”な牛の全頭検査に使うのはどうか？世界の中で、牛を全頭検

査している国は日本だけ。今日の三宅さんのような方が日本の国の意見だとしたら、多くの国民は失望する。これ以上、国の負債を増やすべきではない。

- ・ 検査感度の限界。アメリカ牛の輸入について。
- ・ 全頭検査の年齢が変更されるのかどうか？アメリカの輸入は再開されるのか？この2つは関連しているのか？
- ・ S R M除去の徹底について。スクリーニング検査の対象月齢。
- ・ どのように終えんしていくのか。国側は収束させようとしているように見える。タイミングをはかっている？
- ・ 国内、海外の牛肉の安全。B S Eの情報。
- ・ 全頭検査の意義。
- ・ 手 人への感染課程が明確になれば“安心”につながる。これが明確でない限り“不安”は常に残るのではないか！O - 1 5 7など感染率の高い病気があるにも関わらず、それ程“不安”にならないのは、感染課程が明白であるからと思う。
- ・ 米肉の輸入再開。交差汚染対策の有効性。
- ・ アメリカ産牛肉の輸入再開について。再開に反対ではないですが、結論を急ぎすぎている気がします。慎重な議論を望みます。
- ・ アメリカ産牛肉の輸入再開。
- ・ S R M除去は大切。管理も十分行っていただきたい。
- ・ 安全対策が十分か否か。
- ・ 偽装、いんべいが最大のリスク。
- ・ 1) 輸入牛の実態。特にアメリカのリスク低減の実態。2) 若齢牛のプリオン蓄積の検出の限界はどのくらいか。若齢牛を一律に言うのではなく、年齢を少し区分して説明してもらいたかった。
- ・ 全頭検査。米国からの牛肉輸入再開。
- ・ 米国牛肉の輸入再開問題。
- ・ 他の多くの政策課題のSolutionについて提起することが多い。
- ・ 全頭検査の必要性があるか。検査方法にはどこまで信頼性があるか。安全性への情報はどうすべきか。
- ・ 科学的評価と消費者の安全への考え方にキヨリがある。科学者も消費者の視点で議論すべきである。
- ・ 1、S R Mが本当に適切に除去されているのか。これをどのように把握しているのか、どのように検証するのが問題のように思います。2、又、国民に上記状況をきちんと説明することが必要と思います。
- ・ 発生のメカニズム。日本の発生牛の原因を明らかにすることが必要。肉骨粉だけではないのではないか。
- ・ 新聞の全面広告で、米国食肉輸出連合会がアメリカの牛肉は20万頭を対象に検査していて安全。日本国民は安心して食べてほしいと輸入の早期再開を推進するようにとの主旨であったが、この様な業界や政治的な配慮で輸入再開を決める様なことにならない様、冷静なる評価を貴委員会に出して頂き、その上で十分な検討を重ねた上での輸入再開を望みます。
- ・ 日本の対策の見直しが前提（ピッシング、脊髄除去など）。米国産牛肉輸入問題と

は分けて考えるべき（急がなくてよい）。

- ・ 検査をする立場のため、検査対象の月令や「安全」を消費者にどのように伝えるか？
- ・ 正しいリスク分析の結果を知りたい。リスク評価と管理のあり方を追究したい。
- ・ 日本におけるBSE感染の経路。日本（ドイツ）では、代用乳を介して感染した可能性が指摘されていたと思います。この感染経路が本当に成り立つのかどうか、獣脂そのままではなく、代用乳のかたちで摂取した場合の実験が進められているのでしょうか。
- ・ 輸入再開。

附問5 - 1 上記の関心点について、今回の意見交換会は役に立ちましたか？

1) 大変役に立った	10	10.4%
2) 役に立った	43	44.3%
3) あまり役に立たなかった	21	21.6%
4) 役に立たない	7	7.2%
5) 無回答	16	16.5%

問6 今回の意見交換会の進め方についてお伺いします。

1) 満足	11	11.3%
2) やや満足	46	47.4%
3) やや不満	29	29.9%
4) 不満	1	1.0%
5) 無回答	9	9.3%

また、会の運営等で何かお気づきの点がございましたらご記入ください。

- ・ 安全委員会の審議経緯及びたたき台はHPで事前に見て来て貰うようにして、時間を節約すべき（コミュニケーションの時間を増やす）。
- ・ リスク管理面についての意見交換が重要と思います。
- ・ 司会進行に問題あり。意見陳述の方の意見のポイントをうまくまとめていないと思う。
- ・ 時間がまもられていない。
- ・ 論点の絞り込みがもう少しあっても良いのではないかと（時間の制約がある為）
- ・ もっと掘り下げて正しい知識を伝える事。全頭検査が安心を作っているのではなくSRM除去によって安全が確保されている事。
- ・ 意見陳述は双方向性を確保する上で重要であり、かつ自由を確保することは要諦であると考えます。しかし一方で、意見陳述人は自由に相応した責任があると思います。具体的には、意見について依った立場、つまり誰の意志を反映しているのかを明らかにして陳述した方が良いと考えます。主婦であれば本人と家族の健康の為、畜産業者であれば畜産を代弁してということになるのでしょうか。不明の方々もおられた様です。主婦の方の意見はストレートで良く理解できました。
- ・ 質問点は質問点として明確にして、その質問に正確に答えるようにして欲しい。

- ・最後の女性の意見発表はかなり時間オーバーで切ることも必要。
- ・短い中でこなしているなど思った。
- ・一方的に発表してコメントするスタイルを討議にもって行って下さい。
- ・時間をもっと充分に取って欲しい。
- ・幅広い意見を聞く事は重要であるが、必ずしも全ての消費者の意見が集約されているように思えないメンバー構成であった気がする(ゼロリスク症候群の人が多い)。
- ・前回の食品安全委員会が主催された、1年をふりかえるというテーマの牛のリスクミ(東京)と比べ、とても良かったと思う。会場もよく、リスクコミュニケーション官が司会進行されたこと、異なる立場の方の意見があったことなど、大変良かった。今後もさらに活躍されることを願ってます。
- ・そろそろ関係者席を最前列から後ろの角に変えて欲しい。独立機関として、農水、厚生を離して欲しい。進行をもっとテキパキして欲しい。意見陳述者が、皆時間オーバーで話すのは見苦しい。
- ・もう少し的をしぼって深く論議するのが良い。しぼった的の論議と広い点からの別々の意見交換会を用意する。
- ・意見に対するコメントをするだけで、十分な議論がその場でできる時間を確保すべき。
- ・時間にもう少し余裕をもってほしい。
- ・時間が短い。意見に対する説明が明確でない。
- ・会場の意見がもっと聞ければ良かったのですが。
- ・意見者の方の発言がはやすぎて理解するのに苦労した。もっと意見交換をききたかった。
- ・会後半の意見陳述、および質疑応答の司会者の方が、吉川座長と金子座長代理へ意見を求めすぎていることについて不満をおぼえます。他の委員の方の意見は必要ないと考えてよいのでしょうか。
- ・各自(発言者)の立場ばかりが目立ったものだった。
- ・評価だけで、あとは役人に投げてしまうような印象を受けた(役人にやらせてBSEでは失敗したはずなのに)。また、米国産牛のリスク評価も同時に行うべきで、国民の関心が何かを理解してないように感じた。
- ・相互の意見交換の時間をもっととってほしい。時間も十分とって、それなりにディスカッションもでき、問題点も明らかになった。
- ・陳述者の選択。先生方の“たたき台”の目的・本質を十分に理解せずになされた陳述が多い。科学的な見地・結果・評価なされたリスクを科学的な見地で判断する事なく、自身の利益・政治的な立場からの判断、コメントをする人、しそうな人は選択すべきでない。この会の主旨に反している。
- ・リスク管理についての意見が多く出たが、農水、厚労の両省に答弁させるべき。行政がオブザーバー参加だけでなく、国民とのコミュニケーションに参加させ、考え方を明示させるべき。
- ・吉川、金子両先生にたよりすぎ。
- ・土俵に乗っているテーマは何なのかの規定をしないと話がかみあわない。高橋まみさんの勇気ある発言に感謝します。

- ・ 時間が足りず、意見交換が十分でない。
- ・ 意見陳述をするより、たたき台の金子先生のプレゼンをもとに、もう少し具体的にたたき台自体の理解を深めるコミュニケーションが取れたら、もっとよかったかもしれないと思う。
- ・ やや主婦よりの意見が多かったのでは？もう少し理性的な意見交換が必要では？
- ・ 過激な意見が一部の人からありましたが、多くの国民は安くておいしい牛丼を食べたいのだと思う。
- ・ 意見交換の時間をもう少し長くしてほしかった。
- ・ 時間の設定に無理があると思う（短すぎる）。
- ・ 9人は多すぎる。同様な意見に対する回答が何度もあるため、意見を最後まで聞いた後、総括して回答した方がよいのでは。
- ・ 意見交換の時間をもう少し長くしてほしい。
- ・ 陳述人の選び方が適切であったと思う。消費者は全員米国牛輸入再開に結びつけて考えていた。マスコミのせいもあるが、なぜ誤解されたか、主催者側の反省が必要。
- ・ 意見陳述の時間が長い。回答が重複している箇所もあり、もう少し人数をしばってもよかったのではないかと思った。
- ・ 座りごちが良い。食安委員でするより良い。
- ・ 意見交換により時間を使うべき。
- ・ 意見陳述者が片寄ったのではないか。
- ・ 意見陳述人の落ち人の意見も公開すべき。
- ・ 朝からもっと長時間で討論をききたかった。時間がみじかすぎる。
- ・ 試みの機会であり、十分とは言えないとしても、もっと自信をもって進行した方がよかった。
- ・ 西郷さんご苦労様！
- ・ 一般参加者とも意見交換すべきです。
- ・ 会場との意見交換時間、もう少し必要。その場合の発言時間管理。
- ・ どうしても都合がつかず開催時間に遅れて入場、最後列に座った為、プレスの方のシャッター音と資料を捲る紙の音（カメラマンの方だと思いますが、座席の後ろでガサガサと・・・）、話し声が耳ざわりで、休憩時他所に移りましたが、今少し配慮を頂きたかった。
- ・ 意見交換の時間を確保するため、会議の時間を少なくしても良かったのではないのでしょうか。全体的には大変参考になりました。
- ・ 意見交換会までの日程が詰まりすぎている。Netを利用して、もう少し時間をとって論議することが重要と思う。
- ・ 1人10分は話させてもいいのでは。もちろん短くてもいい。

問7 以下の食品安全委員会の取組みのうち、ご存知のものあるいは利用したことのあるものを全て選んでください。

- 1) 委員会、専門調査会の傍聴が可能なこと（原則公開されていること）
71 73.2%
- 2) 食品安全委員会ホームページ（委員会や意見交換会等の配布資料及び議事録、

意見募集、リスク評価等)

	76	78.4%
3) 食の安全ダイヤル	36	37.1%
4) 食品安全モニター	34	35.1%
5) 食品の安全性に関する政府広報	34	35.1%
6) その他	3	3.1%

- ・ 学習会等で。
- ・ 農水省の食品安全行政メールマガジン。食安委にもあるといい(あったとしたら申し訳ありません)。
- ・ 無回答

附問7 - 1 上記で選択したものについて、御意見やご感想がございましたらご記入ください。

- ・ 遺伝子組換え農産物についてのリスクミを行ってほしい。
- ・ ホームページに議事録が掲載されるのを、もう少し早くできないか。
- ・ 交換会内でもあったが、一般消費者にも理解できる言葉で情報公開をお願いしたい。又、食品安全委員会の存在を知らない消費者がたくさんいると思います。国民の意見を取り入れているとは考えにくいと思います。
- ・ リスクマネジメントについて、意見の交換は行われるのですか？
- ・ トレーサビリティについて、もっと議論してほしい。
- ・ 「食の安全リスクコミュニケーション」・ ポジティブ評価とは。
- ・ 先日、ホームページにひじきについてQ Aが掲載されたが、非常に見つけにくい。もっと上の方にのせるべきでは？もしくは、もう少し見つけやすいようにしてほしい。
- ・ 食品の安全に関する用語集の充実を望んでいます。そこにはない用語は使わないというくらいの意識を関係者が持たないと、一般人には文章が難解でとても理解出来ない。
- ・ 用語集を参考として理解しているが、よりやさしい用語を用いるべき。
- ・ ホームページの字が小さすぎてわかりづらい。食安委は国民の健康を守るために設立されたことをふまえ、リスク評価機関にこだわりすぎず、評価に基づく管理のあるべき内容も踏み込んで提言すべき！
- ・ 傍聴の案内がホームページに掲載されていますが、議題の内容をもう少し詳しく掲載してほしい(例、議題の内容を4～5桁で書いてほしい)。
- ・ もう少しわかりやすい文章がほしい。今日の金子先生がおっしゃったように「わからない」という言葉の羅列が、よけいに消費者を不安にするのでは？
- ・ 公開について、充分になされていない処をインターネット上でやれる様にしたら良い。
- ・ HPは大変見やすく、利用させていただいています。
- ・ 関連する文献、調査報告書についても、HPで公開してもらいたい。
- ・ 意見交換会でも出ていましたが、食について一番関心があるのは主婦かもしれませんが、ですが、ホームページなど難解であったり、委員会が公開されていても知らない人が多数。最終的には情報を自分でどう選択するかになるかと思いますが、

委員会側と消費者側のみぞを埋めていく必要もあると思います。リスクを評価する委員会、それを反映していく各省庁として、消費者の相互理解と連携により、意識も情報（正しいもの）も高めていく努力が必要だと思いました。

- ・ ある団体が、最後に結論づける様な意見に対しては慎重に対応すべき。報道陣はそこだけ強調して流す。その団体は色々な名称を使って（意見陳述含め）参加しており、意見誘導していると感じている。
- ・ 吉川座長の総括、たいへん良かったです。今後もいろいろ会議等でもお願いします。
- ・ 急な場合など、時々、新着情報を食品安全委員会ホームページ上で見逃してしまう。メーリングリストなどで周知してもらえる方法があるといい。
- ・ 安全委員会のホームページは、資料や議事録の掲載が早くて良いと思います。
- ・ 安全委員会は研究の立場ではありますが、リスク回避的（責任を持たない）発言が多いことは確かだと思います。目的があることなので、時には勇気ある発言をお願いします。
- ・ 国内対策についてなのか対外問題なのか、整理が必要と感じました。
- ・ 原さんの意見はごもっともです。コストベネフィットを検討するのはリスク管理機関ということをもっとPRすべきだと思います。
- ・ Risk Assessment は大変良く出来ている。誰かが云われた人への発値は、委員各自のものを出すべき。
- ・ 安全ダイヤルのメールに受信記録をつけてほしい。モニターや人材募集に資格をあげているが、資格がなくてもいい人材はたくさんいると思うので、資格を撤廃してほしい。知識優先で。
- ・ 本日発言しなかった多くの人から、意見提出の機会を・・・。
- ・ 海外の団体専門家等ともより多く情報交換なさを提案致します。
- ・ インターネットで資料公開は、大変良いことと思います。消費者にもっとわかり易く、例えば、本日の吉川先生、金子先生のご講演などは、PPスライドと共に動画で提供する等の試みもトライしてはどうかと思います。
- ・ 意見陳述者の数が多くて、十分な討議が出来なかったのではと少し残念に思いました。評価についても、確かに幅広くするのは大変かと思うが、やはり必要と思われる範囲については出来るだけ広範なものを求めたいと思います。日本生協連の原氏の意見に賛同します。
- ・ 全委員が出席したこのような機会を多くもって下さい。
- ・ 早期に確実にこれらを実施されていることに敬意を表します。しかし、BSEの問題は軽率に判断すべきでないと感じる。
- ・ 意見交換会での主婦のかたもいったように、子供たち、いまの若者たちにも、分かりやすく、BSEに関心を与えてほしいです。自分自身も学生の立場で少し分からない点もありました。

食品に関するリスクコミュニケーション（大阪）

- 日本における牛海綿状脳症（BSE）対策の検証に関する意見交換会の概要 -

1. 日 時：平成16年8月24日（火） 13:00～16:00

2. 場 所：オーバルホール（大阪市北区梅田3-4-5）

3. 主 催：内閣府食品安全委員会、厚生労働省、農林水産省

4. 参加者：約260名

5. 議 事

（1）開会挨拶

寺田 雅昭 食品安全委員会委員長

（2）講演

「日本における牛海綿状脳症（BSE）対策について」

金子 清俊 食品安全委員会プリオン専門調査会座長代理
（国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第七部長）

（3）報告 「牛海綿状脳症（BSE）対策の現状について」

1）牛のBSE予防対策

釘田 博文（農林水産省消費・安全局衛生管理課国際衛生対策室長）

2）牛肉の安全対策

坂梨 栄二（厚生労働省医薬食品局食品安全部監視安全課乳肉安全係長）

- 休 憩 -

（4）パネルディスカッション

コーディネーター：中村 靖彦 食品安全委員会委員

パネリスト：金子 清俊 食品安全委員会プリオン専門調査会座長代理

海津 澄子 食品安全委員会企画専門調査会専門委員
（フードコーディネーター）

飯田 秀男 全大阪消費者団体連絡会事務局長

足立 梅則 兵庫丹但酪農農業協同組合副組合長

加藤 一隆 （社）日本フードサービス協会専務理事

アドバイザー：松本 義幸 厚生労働省大臣官房参事官

姫田 尚 農林水産省消費・安全局消費者情報官

（5）会場参加者との意見交換

（6）閉会挨拶

見上 彪 食品安全委員会委員

6. 主な議論

(1) パネルディスカッションの冒頭、コーディネーターより、

プリオン専門調査会の検証作業について、米国からの牛肉輸入再開と関係づけて捉えられている向きがあるが、この検討は3年前から実施されている国内対策の検証に限られており、輸入再開と直接関係のあるものではないこと、

食品安全委員会の検証作業がまとまっても、それで直ちに米国産牛肉の輸入の是非が決まるというものではなく、米国産牛肉輸入再開の可能性等については、更に種々の検討が必要であること

を説明、その後、パネリストから「たたき台」修正案について概要以下の意見が出された。

vCJD の発生リスクの試算について

- リスクの大小を定量的に把握するため現在の知見の範囲で試算することが必要。
- 未だデータが乏しいのでこのような試算は時期尚早。

検査の意義と限界について

- 現在の技術では検査で安全性を確保するのは難しいので検査はサーベイランスに限るべき。
- 全頭検査は、若齢感染牛を排除するなど消費者の安心と結びついているので見直すべきではない。
- 若齢感染牛に関しては、研究材料としては重要だが、異常プリオンの量的な観点から安全対策の対象とすべきではない。

特定部位(SRM)の除去について

- 今後 SRM の範囲が拡大していく可能性があり、不安である。
- 現在の除去では不十分。
- 現在判明している SRM 部分を除去すればリスクは十分低減できていると考えるべき。

その他の管理措置（飼料規制、トレーサビリティ、と殺解体方法等）について

- 現場での実際の対応に懸念がある。
- 肉骨粉の使用禁止以降に誕生した牛に感染がみられたことから、飼料規制の実効性に懸念がある。
- 対応する生産者の事務的な負担が多いが必死に対応しているところを理解して欲しい。

取りまとめ案が難解なので、一般向けの解説資料が必要。

(2) その他、会場より、国内措置の検討に当たって、以下の意見があった。

食品安全委員会は、科学的知見よりも消費者の安心を勘案した評価をすべき。

科学者、専門家の考えていることが未だ消費者に安心感を与えていないので、十分なリスクコミュニケーションが必要。

(以上)